

---

# ハピネス～僕と私の彼のキセキ

月織黎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハピネス〜僕と私の彼のキセキ

### 【Nコード】

N3082K

### 【作者名】

月織黎

### 【あらすじ】

医者を目指す少年・白神慧と、『名前がシンメトリーだから』という理不尽な理由でいじめを受け続けてきた少女・章田埜亜は高校の入学式の日に出逢い、慧に一目惚れした埜亜がその年のクリスマスイブに告白したことをきっかけに付き合い始めるようになる。慧の親友・フランス人と日本人のハーフである佐々賀紫紋も交え、三人は幸せな運命を辿っていくはずだった。しかし、運命の歯車は三人に残酷な試練を与えていく……。

## 出逢い。(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・《 》で書かれている部分は傍点（強調）

出逢い。

\*

「……出逢いは、些細」

少女は語り始める。

そおつと。

ゆっくりと。

大切な宝物を撫でるように。

「もう、五年も前のことになるのね」

優しく。

温かく。

春の陽だまりの中でふとまどろむように。

少女は、彼女の中に宿る想い出を静かに思い出し、音に乗せる。

これから始まるのは、

平和で、

平凡で、

悲しい、

シアワセの物語。

## HAPPINESS

(章田埜亜?)

白神<sup>しじがみすい</sup>慧は首を傾げた。

四月七日。慧は晴れて第一志望の私立高校に入学した。全国的に有名な、平均偏差値六十八を誇る県内随一の進学校だった。医者を目指す慧にとっては一つの登竜門であった。

入学式で長々とした学園長の訓辞を聞かされ、案内されたクラスはB組とあった。生徒数二十八名。慧の出席番号は十番であり、席は廊下側から二列目の二番目。

悪くない、と慧は心の中で呟いた。成績優秀とはいえ、彼はいわゆるガリ勉タイプではない。勉強する時は勉強にのみ集中し、休む時はこれでもかというくらい休む。幼稚園の年長で九九を暗記し、医学部志望というくらいだから勉強は嫌いではない慧だが、それ以外に、いや、それ以上に大切なものがあるということを知り、彼は既に知っていた。

故に慧が教室の席に座ると同時に始めたのは、円滑な学園生活を送るのに必須である『クラスメイト全員の顔と名前を覚える』、だった。少数精鋭の進学校ということで人数はそう多くない。ひと月はかからないだろうな、と思いつつ一通り目を進めていて、自分の一つ上、つまり九番目で慧の目が止まった。

九 章田 埜亜 ショウダ ノア

とあった。

これを見て慧が最初に思ったのは、

「男？ 女？」

でも、

「変わった名前だな」

でもなく、

「《なんだろう》？」

という、漠然としたもやもやだった。

少なくとも、名前に覚えはない。物心ついた頃から中学校までの十数年間に会った人間のこと全てを覚えているわけでは流石にないが、聞けば名前くらい思い出す。特徴的な名前なら尚更である。知人である可能性はゼロと言って良かった。

（章田埜亜、しょうだのあ、ショウダノア……）

頭の中で色々と変換を繰り返すこと三十秒、あることが閃いた。

その時の慧の頭の上には、昔の漫画なら間違いない光った豆電球が描かれていたことだろう。

章。  
田。  
婪。  
亜。

縦に並べてみて分かった。この四文字、《四文字とも左右対称なのだ》。

「章田婪亜……」

思わず口が発音していた。完全に無意識だった。綺麗な発音だな、と素直に思った。

「……なに？」

前の席に座っていた女子が振り向く。束ねたポニーテールがふわりと揺れた。女子だったのかと今更にして気が付く婪。

「えつと……、章田？」

「だから、なに？」

婪は正面から婪亜を見据える。若干吊り上った、吸い込まれそうな程大きな瞳。リップクリームでも塗っているのか、唇は少しつやつやしている。鼻は日本人にしては……高い方かもしれないし低い方かもしれない、要するに婪には分からなかった。でも下手な芸能人なんかよりは余程均整のとれた顔立ちをしている。特に深い黒色の瞳と茶色がかったポニーテールが印象的だった。

「……なんなの？」

三度目。婪亜は今までで一番怒気を孕んだ声を発した。事実、彼女は知らない男に自分の名前を呼ばれて苛立っていた。ましてや、それが自分の嫌いな名前なら尚更である。

そう、婪亜は自分の名前が嫌いだった。左右対称だから。そんな理不尽な理由でいじめを受け始めたのは小学三年くらい、つまり漢字のある程度覚えた頃からだ。

それまでは自分の名前が大好きだった。ノア、というのは子供心にとても綺麗な音だと思った。旧約聖書に出てくる人物と同じ名前だと母親に聞いてからはもっと好きになった。

その反動で、埜亜はそれをひどく不快に思うようになった。おかげでいじめられるようになったから。靴を隠されるようになった。ゴミを投げつけられるようになった。教科書やノートに落書きされるようになった。一番ひどかったのは小六の時、朝学校に行くと、菊の花が入った花瓶が埜亜の机の上に置かれていた。前日にその暗喻を用いた、流行りのテレビドラマをやっていた。埜亜も見ていて知ったため、ひどくショックを受けた。幼稚といえど幼稚だが、あまりに残酷だ。その夜、埜亜は母親に『お父さんと離婚して』と頼んだ。章田は父方の姓だったからだ。ふざけないで、と正座させられた。箱舟なんてどこにもなかった。

中学に上がってからは直接的ないじめはなくなったが、逆に陰湿な嫌がらせを受けることになった。あからさまに無視されたり、掃除当番を一人に押し付けられたり。あだ名は『シンメトリー』だった。

でも、一時期一人だけ仲の良い女子がいた。三年の夏、風邪をひいて学校を休んだ際に家まで進路希望のプリントを持って来てくれたクラス委員の子だった。『体調はどう？ 明日一緒に遊ぼうね』優しくそう言われたのを覚えている。翌日は久しぶりに学校が楽しみだった。その子とは毎日話すようになった。その子も笑って応じてくれた。

ひと月程したある日、埜亜がトイレの個室で用を足しているとその委員が他のクラスメイトと一緒に入ってきた。嫌でも話声が聞こえてきた。

『なによアンタ？ 最近仲いいみたいじゃん、《あの》シンメトリーなんかと』

『まああたし一応クラス委員やってるし？ それに今年は受験だから、ここら辺で担任の内申稼いどくのもいいかなーって思ってたさ』

埜亜は息を殺して泣いた。裏切られた。誰も信じられなかった。

それ以来、埜亜はずっとひとりぼっちだった。成績は良い方だったし、何よりみんなを見返してやりたい一心で勉強に打ち込んだ。

おかげで県内トップの高校に推薦入学が決まった。祝福してくれたのは家族と担任だけだったが。埜亜も別に嬉しくなかった。

そんな人生を歩んできたおかげで、埜亜はかなり内向的性格になった。高校に上がっても彼氏はもちろん、友達すら作るうなんて考えなかった。ただ、静かに生活させてほしかった。そんなささやかな希望を初日から打ち砕いたのが……。

白神慧である。

(なんなの)

四度目は口に出さなかった。声にすると怒鳴りそうだったからだ。いきなり目立ちたくない。

「埜亜埜亜」

また呼ばれた。いい加減にして欲しい。不快な発音を連呼するなと胸の中で毒づいた。

埜亜が黙って前に向き直ろうとした時

「いい名前だね」

目の端に、向日葵のような穢れなき少年の笑顔が目映った。

まず耳を疑った。次に目を疑った。最後に頭を疑った。どこにも間違いは見つからなかった。

そして、次の言葉は更に信じられなかった。

「埜亜、友達になろう」

埜亜の視界で一瞬、慧の笑顔がぼやけた。

章田埜亜　それが、白神慧が高校で一番に出来た友達の名前で  
あり。

白神慧　それが、章田埜亜が人生で一番に出来た好きな人の名前だった。



出逢い。(後書き)

月織の作品には珍しく、バトルやファンタジー要素がほとんどないリアル寄りの物語です。既に書き上がっている短編ですが、細々区切って更新していくので、もしかしたら長くなるかもしれません。宜しく願います。

## 告白（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ ≪≫ で書かれている部分は傍点（強調）

## 告白。

「……笑っちゃうと思わない？」

柊亜は言葉の通りに笑いながら言った。リクライニングベッドの上で半身を起こして寝ている慧に向かって。

白いベッド。白い壁。白いカーテン。白い……雪。

季節は冬だった。

「今時一目惚れよ？ それもただ名前を誉められただけ。また裏切られるかもしれないのに、一縷の希望に縋ってまた信じちゃった」

「……」

慧は終始俯き加減で黙って聞いている。

「でも、慧は裏切らなかつたよ。本当にずっと……ずっと友達でいてくれた。友達で、親友で、そして」

柊亜は静かに 僅かに声を落として。

「……恋人になってくれた」

十二月二十四日のクリスマスイブ。柊亜は慧に告白した。

入学式の日以来、慧と柊亜の仲は急速に縮まっていった。もともと明るく人当たりも良い慧はすぐさまクラスの中心的人物になり、また、その友達である柊亜の周りにも自然と人が集まってきた。最初はどう接するべきか困惑していた柊亜だったが、徐々に笑うことが多くなり、性格も少しずつ前向きなものに変わっていった。そんな柊亜をいじめるようなクラスメイトは一人もいなかった。そも、『名前が左右対称だから』などという理由でいじめるのが子供の過ぎたのだ。恐らく中学までのクラスメイトも、今更引くに引けない状態だったのだろう。そう考えると、柊亜は楽な気分になれた。

そして十二月二十四日。二学期の終業式が終わり、慧も交えた男

女数人で遊びに行く、との名目で呼び出されたはずが、埜亜が集合場所に行ってみるとそこにいたのは慧一人。どういうことかと言い出しっぺの友達に電話で問い質してみたら、『ごめーん。みんないきなり急用が入っちゃったのー』という悪びれない笑い声が返ってきた。

はめられた、と理解した。自分の慧に対する気持ちなど周りには筒抜けだったようだ。というわけで、埜亜は好きな男子と二人つきり遊びに行くことになった。初デートだった。行き先は遊園地。これではますますデートじゃないかと埜亜は心中穏やかではなかった。

そして向かった遊園地。こうなればヤケだとはかりに埜亜ははしやいだ。手始めにジェットコースターに乗り、コーヒーカープを高速回転させ、また違うジェットコースターに乗り、軽い昼食を園内のテラスでとつた後に別のジェットコースターに乗って、ホラーハウスで喉が哽れるほど叫び、再び最初に乗ったジェットコースターに並ぼうとした。

G に対する抵抗は男性よりも女性の方が高いと言われている。いい加減慧がグロッキーになったのは言うまでもない。慧は小休止を兼ねて観覧車に乗ることを提案した。埜亜の心臓がかつてない程大きくはねた。密室に二人きりだ。

ゆっくりゴンドラが上昇していく。真冬のイブの空は十七時を回って早くも茜色に染まり始め、高いところから見る夕暮れと灯り始めたイルミネーションが世界を神秘的に彩っていた。

二人の乗るゴンドラは、静かに上昇を続けていた。

「……ねえ、白神」

埜亜は沈黙に耐え切れなくなって口を開く。告白する絶好のチャンス、と、なけなしの勇気を振り絞って顔を上げる。

「うん？」

ただの返事。それにすら恋する少女は過剰ともとれる反応を起こす。顔面に血液が集中するのを自覚した。

「……なんでもない」

故に、埜亜が辛うじて口に来たのは誤魔化しの一言だけだった。一度は上げた目線を下に向け、再び沈黙の帳が下りる。

気まずい。

その時の埜亜の心境をこれほどの確に表現した単語もないだろう。慧は窓の外を眺めて風景を俯瞰している。気楽なものだ、と埜亜はちよつと恨めしく思った。

不意に、そんな慧が口を開く。

「……ごめんな、埜亜」

「え……？」

突然の謝罪。意味も分からず埜亜は顔を上げた。

「せつかくの終業式。みんなで楽しく遊びに行く予定だったのに……一緒にいるのが俺みたいなの一人だけなんて、さ」

慧の顔は本当にすまなそうにしている。視線こそ埜亜の方を見ないが、その瞳は憂いを帯びていた。

「そ、そんなこ」

「埜亜もみんなと一緒にの方が良かっただろ。恋人でもない男と二人だけで遊園地なんて楽しくないよな。気付いてる？ 今日の埜亜、《まだ二回しか笑ってないんだよ》」

「ッ」

思わず口元を押さえてしまった。唇は硬く一文字に結ばれ、笑顔と称するには程遠い。

気付かなかった。自分の表情にも、慧が自分のことをそこまですぐに観察してくれていたことにも。

そして、慧も気が付いていなかった。それは決して面白くないからではなく、彼女が自分のことを好いてくれている気持ちにいつぱいいつぱいで、表情を取り繕う余裕がなかっただけだということに。そういう、男なのだ、白神慧というのは。自分の非を探す天才、とでも言おうか。自身に対してのみ、九十九の善より一の悪を重視する。それは慧の最大の長所でもあり原罪でもあった。

「白神っ、ちがつ」

「この観覧車が終わったら帰ろう。それで、今度はみんなで楽しく」

「だから違うのっ!!」

思わず大声を張り上げる埜亜。狭いゴンドラ内に声が反響し、空しく木霊する。恋という怒涛を抑えきれなくなった埜亜の心の堤防は完全に決壊した。

「バカ！ 鈍感！ なんで気付いてくれないの……!? 私……っ、私は……っ！」

止まらない想い。止まらない鼓動。止まらない言葉。止まらないゴンドラ。そして。

「私はアンタが好きなのっ！ ずっとずっと……はじめて会った時からアンタが!! 白神のことが好きだからっ、だから今日だっつとドキドキしっぱなしなの!! 笑えるわけ……」

ぽと、と。膝の上で握り締めた埜亜の拳に何かが落ちる。それは涙だった。一滴の涙。世界で一番綺麗な雫。

「笑えるわけ……ない、じゃない……」

溢れる涙に反比例するように尻すばみになっていく埜亜の声。それでも痛い程の感情は慧の胸に刃のように突き刺さった。

「……それは、友人として？ それとも、異性として？」

慧の口から思わず咄嗟に出たのはそんな言葉だった。なんて間抜け。言っただけから慧は自分の馬鹿げた発言にほぞを噛む。

埜亜は答えない。ただ嗚咽を堪えて涙を流し続けるだけ。沈黙が全てを物語っていた。

慧は考えた。悩みに悩んで、目の前で分岐する選択肢の中から最善を模索する。

そして、出た結論。

「……俺も埜亜のことが好きだよ。でもさ、俺はみんなが好きで……家族も他の友達も、勿論、埜亜も、みんなみんな大好きで。だから埜亜に対する？好き？、それが特別な？好き？なのか、？like

e?なのかな?love?なのかな?...自分でも、よく、分からないんだ。だから、ごめん、このまま　それをうやむやにしたまま付き合うとかいうのは「

出来ない。」

それが慧の応え。嘘偽りのない本音。多数を大切にせず、本当の?大切?が何か見失いかけている彼の姿は、ある種の道化を思わせる。それでは本末転倒だ。白神慧という男は誰よりも謹直で、実直で、愚直だった。

「じゃあさ」

ふと、声が聞こえた。涙で僅かに掠れた声。出来ない、という慧の言葉を遮るように低く落ち着き払った声を発したのは当然の人物。「じゃあさ。確かめようよ。白神の気持ち。その気持ちか?like?なのかな?love?なのかな。確かめてみようよ」

さつきまで嵐のように荒れ狂っていた章田埜亜の心は、今や嵐の如く鎮まり返っていた。埜亜は口だけが別の生き物になってしまったかのように言葉を発する。ただならぬ覚悟に気圧される慧。

「確かめる...って、どうやって」

莫迦みたいにオウム返しする慧に対して、埜亜は顔を上げて言った。

「キス、しようよ」

この時の埜亜は?恋?という媚薬に酔っていた。焦点は合っておらず、耳朶は麻痺し、正常な思考回路はシャットダウンされ、ただ妄信的に目の前の慧を見つめていた。

慧からの返事はなかった。実際はあったのかもしれないが埜亜には聞こえなかった。目を閉じる埜亜。視界が閉ざされる。

慧は迷った。いいの?か?　理性が問いかける。自分の気持ちは?恋?ではないかもしれない。それをあやふやなまま彼女に伝えていいの?か?　誤った答えを出して、最後に傷付くのは彼女なのだ。

考えた。必死に考え抜いた。こんなに頭を働かせたのは、円周率が3.14以上であることを証明した時以来かもしれない。脳がオーバーヒートするまで考えた答えは、否だった。

(でも……)

しかし、それなら。

(俺は……)

目の前のこの少女の必死な覚悟を、無駄にすることが出来るのか

答えは。

「……んっ」

これも、否、だった。

唇が重なる。触れ合うだけの浅いキス。ついでにむだけの稚拙なキス。時間にしてしまえば、たったの0.8秒。

でも、それにはきつと魔法がかかっていたのだろう。

(……ああ、聖なる夜にはうつつつけの魔法かもしれないな)

慧の心にかかっていた靄が晴れ渡るようだった。唇を離す。

目を開く埜亜。不安に揺れる瞳。とろんとした目尻には新しい涙の粒が浮かんでいた。

「白神……」

「……ごめん」

慧は頭を下げた。彼の心は、魔法で呪いを解かれたかのように鮮明だった。

「……白神？」

謝罪の言葉。否定の言葉。半泣き声がゴンドラ内に響く。

さっきのキスが呪縛を解く魔法ならば。

頭を上げる慧。そして。

「ごめん、埜亜。？love?だったみたいだ」

それもまた、魔法の言葉だったのだろう。

過去と、現在と、未来を繋ぐ、とっておきの魔法。

埜亜の顔が歪む。しかし、歪んで尚、泣き濡れて尚その顔は美し



かったのだ。何故なら。

「……………バカ」

涙は消えなかったけれど。

「自分の気持ちにさえ気付かないなんて、ホントに鈍感なんだから……………」

その顔は、確かに笑顔だったのだから。

再び唇を重ねる両者。今度は深く、もう離れないと主張するかのような口づけ。

ゴンドラは最上に登りつめ、世界は茜から藍へと彩りを変え、二人を祝福するように粉雪が舞い始めた。

ホワイトクリスマスだった。

聖夜。

この日、一つの恋が産まれた。

告白。(後書き)

とりあえず、まだしばらくはベタベタなラブコメが続きます。長い目と広い心で見守っていて下さい。

## 初詣 (前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の ( ) で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ ≪≫ で書かれている部分は傍点 (強調)

## 初詣。

\*

「友達から恋人になるには、最適の日だと思わない？ それからもしばらく私は涙が止まらなくて。観覧車を降りた時の係員の顔なんて……ふふっ、今思い返しても可笑しかったなあ……。広場のベンチに座って、慧に頭を撫でていてもらって……夜のパレードの頃になってようやく泣き止んだんだっけ」

埜亜の臉には、その光景が鮮明に浮かんでいた。

カップル達でこつた返す遊園地内。電飾きらめくツリーやパレードカー。大音量で流されるありふれたクリスマスソング。舞い散る雪の結晶。そして、繋がれた二人の手と手。

「あの時の気持ち、あの時の温もり、あの時の胸の高鳴り。今でもはつきり思い出せる」

埜亜の頬がほんのりと紅をさす。はあっ、と口から漏れたため息は無意識のものだった。ため息をつくとき幸せが逃げる、なんてよくいうけれどそんなのは嘘だ。幸せだからこそ出るため息だつてある。「それからは毎日、暇さえあれば電話やメールしてて。自分で言うのもなんだけど、かなりのバカカップルだったと思う。私って意外と独占欲強かったみたい」

ふふっ、と懐かしむように笑う。

「でも、その割にはなかなか慧のこと『慧』って呼べなくて。心の中では何度も何度も繰り返し練習したのに、成果が出たのはそれから一週間も後のことだった」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………えーと。埜亜……………だよな？」

一月一日、元日。晴れて彗と埜亜が出逢ってから、そして恋人同士になってからはじめて迎える新年最初の日、二人は近所の神社に初詣に来ていた。年明けを飾るに相応しい快晴。絶好の初詣日和だ。……………だった、のだが。

「……………なによ。白神は付き合い始めたばかりの彼女さんの顔を、もう忘れちゃったわけ？ 私なんてその程度の存在だったわけ？」  
刺さるような視線が痛い。無論、埜亜も本気で言っているわけではないし、彗がそんなに薄情な人間ではないことは承知の上なのだが、憎まれ口というのは自然と出てしまうもので。開口一番、面と向かって本人確認を求められては尚更である。

「そ、そんなわけないって！ ただあの、その……………」  
「その？」

「……………まさか、振袖姿で来るなんて思わなかったから……………」  
そうなのだ。

普段は学校にいたので一番見慣れているのは制服だし、たまの休みで私服に身を包んだ埜亜を見たことがないわけではない。

けれど今日の埜亜は、見目鮮やかな赤色の振袖を纏っている。トリードマークといっても差し支えないポニーテールをほどいて垂らせているというのも相まって、一瞬本当に誰か分からなかったというのほここだけの秘密だ。

「えっと、改めまして。明けましておめでとう、埜亜。今年も宜しくお願いします」

「あ、うん。明けましておめでとうございませう」  
仰々しくお辞儀をし合う二人。あの遊園地での告白以来、直接は会っていないかったので、どちらもかなり緊張していた。

「……………ねえ、白神……………」  
いつになく硬い声で いかにも恐る恐るといった様子で呼びかける埜亜。

「うん？ な、なに？」

一方、慧も平常を装っているものの声が微妙に上ずってしまった。我ながら情けない、と自己嫌悪に陥る慧少年であった。

「こ、この格好……」

埜亜は着物の袖をつまみ上げ、ぎこちない笑みを浮かべながら上目遣いに。

「……………変、かな？」

と訊ねた。

「」

会心の一撃だった。あまりにもいじらしい姿。その可愛さは反則だと思いつつ、慧はキューピッドの弓で心臓を射抜かれたように動けなくなった。

「へ、変じゃない変じゃない！　すごく似合ってる！　可愛いよ！　！」

「ちょ……………っ！　バカ、声が大きい！」

思わず慧の口を押さえる埜亜。道行く参拝客からクスクスとした忍び笑いが聞こえる。二人とも真っ赤だ。傍から見ていると実に初々しくて微笑ましい光景だが、当の本人達にとってみればちよつとした拷問にも等しい。

「ご、ごめん……………」

「い、いいって……………」

「ごめん……………。でっ、でも似合ってるのは本当だから！」

「だからいいって言うてるでしょバカ！　ほら、早く並ぶよ！」

そう言つて埜亜は参拝客の列の最後尾に並んだ。慧も慌てて後を追う。流石は元旦、境内の混み具合は相当なもので目を放すとあつという間にはぐれてしまいそうだった。

埜亜はこっそり慧の上着の端をつまんだ。慧もそれに気付いたが敢えて何も言わなかった。二人の間に流れる、心地良い沈黙と安心感。周囲は雑多人込みでやかましかったが、不思議と不快ではなかった。

やがて列は進み、慧達の番になる。名残惜しげに慧の服から手を

放す埜亜。

賽銭箱に五十円玉を投げ入れ、鈴を鳴らし二拝二拍手一拝。目を瞑る。神頼みの作法に則って今年初の願い事をかける慧。最後に浅く一揖いちゆうして顔を上げると、ほぼ同じタイミングで二人とも顔を上げたところだった。

「何を願ったの？」

列から外れ、早速埜亜が訊いてくる。

「んー、とりあえず無病息災。あとは学業成就」

「うわ、ベタだなあ。まあ、白神らしいといえればいいけど」

「……あと」

慧は言い辛そうに顔を背けて続けた。

「……埜亜と、ずっと一緒にいられますように、って」

「ッ！」

不意打ち気味の一言によって瞬間的に顔面が沸騰する埜亜。そして顔を背けると、精一杯の強がり口にした。

「き、奇遇ね。わ、わた、私も同じことをお願いしたわよ。し、しら……しら……す……」

「……白子？」

「ち、違つわよっ！ 私がお願いしたのは……、すーはー……すーはー……」

深呼吸を数回して埜亜は自分を落ち着かせた。極度の緊張で不意に尿意すら覚えたが、ぐっと丹田に力を籠めて堪えた。そして。

「す、《慧》と、これからずっと一緒にいられますように……って」

彼女の真つ赤な顔を見れば、そのなんでもない一言にどれだけの勇気が必要だったかは想像に難くない。今の埜亜なら二月十四日の乙女にだって負けないだろう。

「……」

「な、なによ、なんとか言ってよ……」

睦月の朝は冷える。気温は氷点下まで落ち込み、吐く息は須く白い。だというのに、埜亜の額や背中には玉のような汗が浮かんでい

た。

「は、ははは……」

ふと、慧が乾いた笑みを零す。一体どうしたことかと目を見張る  
埜亜だったが、その頭に置かれる掌があった。

「はは……。なんだか俺達、遠回りばかりしてるな」

実際は、冷たい掌だった。手袋もしていない慧の手は冷え切って、  
指先はかじかんで痛いくらいだ。

それでも、確かに温かかったのだ。それは、？人？という存  
在だけが持つ不思議な魔力なのだと、埜亜は訳もなく悟った。

「なあ」

「な、なあに？」

「もう一回、呼んでくれよ」

ちよっとした悪戯心と、真剣な純情。それらが螺旋のように混ざ  
り合って、慧の口から言葉として自然と発せられた。

「……………す、慧」

まだ慣れないのだろう。たどたどしく、聞こえるか聞こえないか  
の声で、自分の名前を呼んでくれる埜亜。好きな人に名前を呼ばれ  
るという事実、それが慧にとって例えようもなく嬉しかった。

どんなに煩い場所でも。

「これからも、宜しくな、埜亜」

どんなに小さな声でも。

「う、うん。こちらこそ、宜しく、慧」

彼女が自分を呼ぶ声だけは、絶対に聞き逃さない。  
心の底から、そう確信できた慧であった。



## 初詣。(後書き)

クリスマスの次はやはり初詣でしょう。初心な二人に照れ照れです。でも実際に高校生で振袖つて着ないよな……。なんて細かいことを考えてはいけませんよ？

## 幼馴染。(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・《 》で書かれている部分は傍点（強調）

## 幼馴染。

＊  
栞亜は慧の手を両手でそっと包み込むように握る。

「私の手、温かいでしょう？ これも慧が教えてくれたこと。外はこんなに寒いのに、不思議よね」

「……………」  
慧は抵抗しなかった。ただ静かに、栞亜の温もりを享受しているだけ。

「新学期が始まってからは、みんなに散々からかわれたわ。でもみんな笑って受け入れて祝福してくれて、一緒になって喜んでくれた。恥ずかしかつたけどそれ以上に嬉しかったわ。中学の頃は、私のこと祝福してくれる人なんていなかったからさ」

それからしばらく平穏な時間が過ぎていった。三学期が終わり、春を迎え二年生に進級して、夏になる。

「慧のために慣れない料理にも挑戦したわ。最初は上手に出来なかつたけど、ちよつとずつ上達していった。やっぱり家庭的な女性って魅力あるじゃない？」

冗談めかして言った言葉。栞亜は笑った。慧は笑わなかった。

「そして、夏休みの中頃くらいだったかな？ 今日とは打って変わってとても暑い日だった。…………紫紋君と出逢ったのは……………」  
そう言っつて再び、栞亜は過去に想いを馳せた。

「グーテンターク？」

「ええっ？ え、えつと……………」

顔を合わせるや否や、外国語で挨拶されてしどろもどろになる栞亜。

「…………おい紫紋。あんまり人の彼女を困らせるな。大体『グーテン

ターク』はドイツ語だろう」

「なはは、バレた？　じゃあ二一八才？」

「遠くなってるだろうが。言うなら『ボンジュール』だよ」

「バカにするなよ彗。俺だってそれくらい知ってるさ」

漫才みたいなやりとりをする野郎が二人。埜亜はついていけず、どうしたらいいのか戸惑っている。

「ああ、ごめんな埜亜。コイツは俺の幼馴染で佐々賀紫紋ささか しもん。日本人の母親とフランス人の父親のハーフなんだ」

「はじめまして、佐々賀紫紋です！」

茶目つ気たつぷりに自己紹介をする紫紋。ご丁寧にも、軍隊よろしく敬礼つきだ。

金髪碧眼、鼻は日本人離れして高く、加えて一八八cmの長身。白馬にでも乗ればどこかの王子様と見紛うのではないかという程の美男子だった。

「あ、は、はじめまして。章田埜亜です。宜しくお願ひします、佐々賀さん」

「ははは、そんなに硬くならないでよ、同い年なんだし。俺のことは紫紋でいいって。言葉もタメ口でいいよ」

「あ、はい……じゃなかった、うん。宜しく、紫紋君。私のことも埜亜でいいから」

「オツケー、埜亜ちゃん」

どこか近付きがたい外見の持ち主である紫紋だが、気さくな性格がそれを見事に相殺している。こういうところは彗と似ている、と思う埜亜だった。二人が引かれ合うのも無理はない、とも思った。

「ところで紫紋。お前いつ日本に帰ってきてたんだよ。急に連絡があつたから驚いたぞ」

「つい三日前。親父の仕事の都合でね。来日公演つてやつ」

フランス人である紫紋の父親はプロのヴァイオリニストだ。日本で暮らしていた紫紋が小学五年の時に鮮烈なプロデビューを果たし、数々の賞を受賞。今や世界的にも有名なソリストである。以来、紫

紋とその家族は世界各地を転々と回っており、つい先日まではロシアにいた。

慧と紫紋は、実家が近かったこともあり、大がつく程の親友だった。紫紋が海外に行ってからでもエアメールなどで頻繁に交流は続いていた。

「で、久し振りに日本に帰ってきてみれば……、なななんと！ 慧に彼女ができたっていう話じゃないか！ これは一度見ておかねば、と思っただけ」

「それでゆうべの突然の呼び出してわけか……」

昨晚、慧は紫紋にメールで呼び出された。挨拶もそこそこに『明日の朝十時、駅前プロムナードに集合。勿論、彼女同伴で（はあと）』というふざけた内容だった。それで言われた通りに来てみればこんな調子だったというわけだ。直接会うのは二年振りだったが、その歳月も紫紋の内面を改変するには至らなかつたらしい。

「でもまあ、安心したよ。昔から慧はこんな性格だからね、特定の彼女なんて一生できないんじゃないかって心配してたんだ」

「あ、それ分かる。慧は目に映る人全員を大切にしようとするから私だつてたまにヤキモチ妬いちゃうもの」

「でしょ？ まあ、埜亜ちゃんみたいな良い子なら安心かな。安心して任せられるよ。ようやく慧も俺から卒業かぁ……寂しくなるなあ」

「……俺はお前のなんだ？」

誉められているのか貶されているのかイマイチ掴めない慧。どちらにせよ目の前で自分の性格に関する談義が交わされているのは気に食わない。

「というか、紫紋の最後の発言はどう解釈してもおかしい。

紫紋は「んー」と一瞬悩んだ後。

「嫁？」

「違う……」

脊髄反射で大声を張り上げる慧。背筋を何か黒いものがぞぞぞと

走るのを感じた。

「あはははは……」

埜亜は呑気に笑っている。余程おかしかったのか、目尻に涙の粒が浮かんでいた。

「紫紋君って面白い人だね」

「埜亜。違う。コイツは《おかしい》人なんだ」

「はっはっは、誉めるなよ」

「誉めてねえ！」

ますますコントのようなやりとりをする慧と紫紋。幼馴染だけあってバツチリ息が合っている。阿吽の呼吸とはこのことだな、と埜亜は思ったが、口になると慧が怒りそうだったので黙っていた。

埜亜の知らない、学校では見せない慧の素顔がそこにあった。同時に、自分は慧のことをほとんど知らないことに気付く。

(ちよつとジェラシー感じちやうかも……)

などと内心で思ったが勿論口にはしなかった。それに、時間ならこれからいくらでもあるのだ。焦る必要はない。

「まあ冗談はさておき。俺もしばらくは日本にいるから気が向いたら声かけてよ。ああそうそう、これ、親父のコンサートのチケット。二人にあげるよ。良かったら来てやって」

そう言つて紫紋は鞆から二枚の紙切れを渡す。一枚二万円するS席のチケットだ。

「いいのか？」

「いいよ。どうせ家族優待でもらったものだし。俺はいつでも聴けるからね」

「そうか。じゃあありがたく頂くよ。サンキユ、紫紋」

場所は市内最大のコンサートホール、公演日は八月三十一日、十七時開場十八時開演とある。ちよつど夏休み最後の日だ。

「それまでに宿題、終わらせないとね」

「そうだな」

なんといつても高二的の夏休みである。慧達の進学校がそんなもの

に目をつけないはずはなく、鬼のような量の宿題が課されていた。

でも、そんな試練も埜亜と一緒に楽しく乗り越えられる。口が裂けても絶対に言いはいはしないが、慧はそう思っていた。

「さあさ！ 炎天下の中での立ち話はこれくらいにしてお茶にしよう！ お近付きの印に、埜亜ちゃんの分は俺が出しちゃうよ？ あ、言うまでもなく慧は自腹だからね」

「分かってるよ」

確かに、もうかれこれ三十分くらい立ち話をしている。正午が迫るにつれ太陽はぐんぐんと本領を発揮し、気温は三十五 近くまで上昇していた。三人とも汗だくだった。

その後、三人は駅前の喫茶店に移動し、クーラーの利いた店内で四時間にわたってだべり続けたのだった。紫紋は一言口を開く度にボケて、その度に慧がツツコミを入れていた。それを見て埜亜が心底楽しそうに笑う。他愛もない三人の会話がこんなにも楽しかった。

八月三十一日。紫紋の父親の公演当日。前日になんとか課題を完遂させた二人は、ちよつと大人のデートを満喫していた。

素晴らしい演奏だった。慧は何度か聴かせてもらったことがあったが、素人の耳でも以前よりも上達していることが窺えた。埜亜はCDやMP3でクラシックを聴いたことはあっても、生演奏ははじめてだったようであたたか感動していた。

G線上のアリアの旋律が場内を厳かに支配する中。

慧と埜亜は、そつと唇を重ねた。

幸せだった。

涙が出るくらい幸せな、かけがえのない日常。

でも。

絶望の足音は、刻一刻と彼らの元へ歩み寄ってきていた。

## 幼馴染。(後書き)

幼馴染登場です。彼はこういった形で物語に絡んでくるのでしょうか？ 次章はこの作品の一回目の『転』に当たる部分なので、そのつもりでお願いします。



## 再現 (前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の ( ) で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ ≪≫ で書かれている部分は傍点 (強調)

## 再現。

「あの頃は本当に楽しかったなあ……」

柊亜は目を細めて言う。

「私、紫紋君、クラスみんな、お父さん、お母さん、そして慧  
。楽しくて、穏やかで、どうしようもなく幸せで……」

まだ慧の手を握ったままの柊亜の手。

その手が、微かに震え出した。

「幸せ、だったなあ……」

これまで、終始笑顔だった柊亜の顔が、震える手に触発されたかのように崩れ出す。

「しあわせ……だった、のに……」

慧の手をぎゅっと握り締める。一度感情が表に出てしまえばもう止まらなかった。溢れ出す涙。ぼろぼろと、床に落ちる。

「なんで、こんな風に、なっちゃうのかなあ……っ」

「……………」

「今でも……、信じられないよ……!!」

柊亜の顔はひどく歪んでいた。あのクリスマスの時とは違う、哀しみに満ちた悲痛な表情。

「慧が……慧がっ! 《記憶喪失だなんて》……………!!」

十二月二十四日、クリスマスイブ。

慧は急いでいた。

今日は柊亜とデートの日。なんといっても、二人の記念日だ。何の記念日かは言うまでもない。終業式を終え、途中まで一緒に帰っていたのでこのままどこかへ遊びに行くのだとばかり思っていた慧だったが。

『せつかくだから待ち合わせしよ？　なんていうか、待ち合わせもデートの醍醐味じゃない？』

という埜亜の意見により一度別れ、駅前プロムナードで待ち合わせする約束を取り付けたのだ。

埜亜にしてみれば、せつかくの告白記念日。どうせなら制服ではなくおめかしした格好で慧と会いたかったのかもしれない。

そんな埜亜の気持ちは露知らず、慧も浮かれ気分でデートの用意をしていた。いくらなんでもタキシードに蝶ネクタイ、などという学生にあるまじき出で立ちで行くわけにはいかないが、自分なりに精一杯めかし込んだつもりだ。

よし出よう、としたその時、慧のポケットで携帯電話が着信を告げた。埜亜からかな？　と思って見てみると、ディスプレイには『佐々賀紫紋』の文字。

「なんだ？　紫紋」

『いきなりなんだとはご挨拶だなあ慧。せつかくのクリスマスだっていうのに』

「せつかくのクリスマスだっていうのに野郎と電話で話してて楽しいと思うか？」

『いやあ、ほら、俺達って恋人同士じゃん？』

「殺すぞデメエ」

性懲りもなくボケを連発する紫紋。それをいちいち真に受ける慧も慧なのだが。

「用がないなら切るぞ。俺は急いでるんだ」

腕時計で時間を確認すると、そろそろ出ないと約束の時間に合わない。慧は少し苛立った口調で言った。その慧の声を察したように、紫紋も本題を切り出す。

『埜亜ちゃんとデート？』

「ああ」

隠す必要もないので正直に伝える。電話の向こうで『ふうん……』という、やけに含みのある声が聞こえた。

『その様子じゃ、何の用意もしてないんだろうなあ』

「……………何の話だよ」

『慧』

唐突に、受話器から真剣な声が聞こえてきた。昔からの付き合いだ、こういう声を出す時の紫紋に冗談は通じない。

『今日は、なんの日だ？』

「なんの日って……………クリスマスイブだろ？」

ごく当たり前のことだ。実は付き合い始めて一年になる記念の日だけど、とは野暮なので黙っておいた。

『プレゼントは？』

「は？」

『やっぱりなあ……………。慧！』

「は、はい！？」

突然電話越しに大声を発した紫紋に、何故か慧は敬語になってしまった。

『せっかくのクリスマス！ そう、クリスマスだ！ プレゼントの一つもなしに彼女に会いに行っても思っているのか？ そんな軽薄な心構えで恋人に向き合ってもいいのか！？ 否！ 良くない！！』

反語。いつになく迫力のある親友の言葉に、思わず唾を呑む慧。

『サプライズで女の子にクリスマスプレゼントを買っていくなんてかっこいいなあ。好感度が一気にアップしちゃうんだろうなあ！。お返しのプレゼントはあ・た・し、とか言われちゃったりして！。あ、これ独り言だから』

そんなわざとらしい独り言があるか、と思ったが確かにその通りだ。プレゼントという発想は慧にはなかった。最後のはともかく紫紋にしてはいいアイディアだ。

「……………分かったよ。サンキュ、紫紋」

『俺はただ独り言を言っただけだよ。それじゃ慧、ご武運を』  
そう言って通話は切れた。

(ありがとう、紫紋……)

心の中でもう一度お礼を言って、慧は家を飛び出した。急がないと埜亜を待たせてしまう。

駅前プロムナードへ続く道とは別の方向　商店街へと足を運んだ。プレゼントは何にしようかと迷う。なにせ、今までに母親以外の女性に何かを贈った経験などなかったからだ。

とはいえ、あまり悩んでいる暇はない。約束の十六時までには、あと十五分しかない。

クリスマスの商店街はどこも賑わっていて、活気に満ちていた。企業側の戦略にうまく乗せられている気がしないでもないが、今日ばかりは乗せられてやろう。

様々な店頭を物色しつつゆっくりと歩いていた慧の目に、ある店が映った。

そこは、アクセサリー屋だった。手頃なシルバーから高価な宝石類、コアな骸骨のペンダントなど多種多様な装飾品が売っている。店があるのは前々から知ってはいたが、慧は入ったことがない。

そういえば、埜亜がアクセサリーの類をつけているのを見たことがないな、と慧は気付いた。埜亜は可愛い。あまり派手派手なものには彼女には似合わないが、さりげなくワンポイント　例えば小ぶりのネックレス　をつければその美貌はかなり映えるのではないだろうか？

慧は店内に入った。早速「いらっしゃいませー」と男性店員が寄ってくる。

「クリスマスプレゼントですか？」店員が尋ねる。流石に慣れているもので、この時期に一人でアクセサリーを買いに来る男の目的など分かり切っているのだろう。「ええ、まあ……」慣れない慧はそう応えた。

「どういった物をお探しですか？」再び店員が尋ねる。「え、えーと……」この手の店に入ったことのない慧は勝手が分からず慌てふためいていた。

「一応、ネックレスにしようかなと……。それもあんまり派手じゃなく、そんなに目立たないのでもいいんで……」

店員は「かしこまりました」と言う。

「それでしたら、ヘッドに小ぶりの誕生石がついている……。こちらなどいかがでしょうか？」

そう言って慧を店内の奥に案内する。言われた通り、ヘッドに小さな宝石がついているネックレスが全部で十二種類あった。

(確か埜亜の誕生日は二月だったな……)

二月の誕生石はアメジストだ。光を受けて紫色に輝く宝石を埜亜が身につけている姿を想像してみる。

(……………いいかも)

そう思って値札をしてみる。ゼロの数が一、二、三、四……。

(ぐあ……、結構するもんだな……)

所詮は学生、手持ちにそれほど余裕はない。慧にとってはこれを買ってしまうと今日のデート資金がすっからかんになってしまう程の大金だった。

だが、最愛の彼女のことを思う。

「すみません、これ、下さい！」

少し格好悪いが、今日のデートは慎ましかにいいこう。そう思って慧は決断した。

品物を包装してもらい店を出る。既に約束の十六時を二十分も回っていた。ここから駅前までは歩いて二十分、走っても十分はかかる。慧は買ったばかりのクリスマスプレゼントを大事に大事に握り締めて全速力で走った。

埜亜は怒っているだろうか。きっと怒っているだろう。そうなっても仕方がない。必死で謝ろう。そうすればきっと許してくれる。そうしたら、このプレゼントを渡そう。きっと喜んでくれる。もしかしたら感極まって泣き出してしまうかもしれない。埜亜は泣き虫だから。その後はどこに行こうか。所持金がなくなってしまうのであまり遠出は出来ない。いっそ、家でケーキでも食べながら

らおしゃべりするだけでもいいか……。 埜亜と一緒にいられれば、  
どんなことだって楽しいに決まっているのだ。

そんなことを考えながら赤信号で立ち止まる。青に変わるまでの  
数分間すらもどかしい。道行く人達は、誰も彼も浮き足立っている  
ようだった。

信号が青に変わった。それと同時に慧は駆け出した。その瞬間

キキイイツ!!

アスファルトの上でタイヤが軋む甲高い厭な音が響いた。

衝撃。

静寂。

悲鳴。

喧騒。

刹那。

宙を舞う、包装されたネックレス。

(あ……プレゼント)

慧の脳裏に浮かんだのはそれだけだった。

慧の視界が暗転する。次いで、思考が遮断される。そして、意識  
が断絶する。最後に、頬に冷たい粒が落ちてきて、慧は《墜ちた》。

ホワイトクリスマス。

一年前の再現だった。

## 再現。(後書き)

この物語は、起承転結の『転』と『承』を繰り返すという思想に基づいて作られた話であり、この章でまず一度目の『転』が訪れます。これから加速度的に進行していくので、どうかお楽しみ下さい。



## 尊罪。(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ ≪≫ で書かれている部分は傍点（強調）

## 尊罪。

結論から言うと、慧は奇跡的に一命を取り留めた。

車が直前で急ブレーキをかけたため幾らか衝撃が和らぎ、大きな怪我也骨折もなく、大事には至らなかった。

ただし、地面に落ちた際に頭部を強く打っており、以来ずっと昏睡状態が続いていた。

埜亜は自分を責め苛んだ。自分が待ち合わせなど提案しなければ、慧は事故になど遭わなくて済んだかもしれないのだ。毎日泣いていた。身体中の水分を全て排斥しようとするかのように泣きに泣いて泣き喚いた。泣き疲れて眠くなっても、寝たらその日の夢を見るかもしれない。そう考えると怖くてとても眠れなかった。食事もまるで喉を通らなかった。少しでも固形物を入れると吐き出してしまうのだ。年が明けた頃には体重が七キロも減っていた。頬はげっそりと痩せ細り、事情を知っていたクラスメイトから見てもその姿はあまりに異常だったという。

ただ、慧の見舞いだけは一日たりとも欠かさなかった。事故からの三日間は精密検査で面会謝絶だったが、それでも病院に行っては検査室の前ですっと待っていた。その時の埜亜にしてみれば唯一の生きる意味であり、贖罪だった。

そして、その隣にはいつも紫紋もいた。これは死んでも話さないだろうが、彼も罪の意識を感じずにはいられなかった。彼がクリスマスプレゼントなどと言って慧を焚き付けなければ、慧は埜亜との待ち合わせに遅れて急ぐようなことはなかっただろう。

二人の心に大きく空いた洞。いや、むしろ心そのものが洞であり、その真ん中に離れ小島のように感情や想い出があるといっても過言ではなかった。

不完全な二人。同じ傷を抱え同じ痛みを共有した埜亜と紫紋。い

つしか二人は、互いの傷を舐め合う野獣のように、求め合うように身体を重ねていた。

慧が目覚める様子は一向にないまま、季節だけが移ろい続けた。春になり、遅咲きの桜が名残を惜しむように少しずつ花びらを散らしていった。

埜亜の心は、あの日のクリスマスに留まったままだった。凍えるような寒風は時を経て止むことなく、徐々に埜亜の精神を蝕み、病ませていきつつあった。

「……ねえ、慧い……」

この日も埜亜は慧の見舞いに来ていた。紫紋も隣にいる。あの日の三人、ただ慧だけが目を覚ますことなく眠り続けていた。

「いつまで寝てるのよ……もう春だよ……？ 寝過ぎすぎだよ、そろそろ起きようよ……」

当然ながら応えはない。にもかかわらず埜亜は壊れたオルゴールのように言葉を発し続ける。

「埜亜ちゃん……」

「私……もう限界だよ……。お願い、これ以上いじわるしないでよ……！」

次第に大きくなっていく声。埜亜の心は既に限界が近付いていた。腕が、横たわっている慧の肩を掴む。

「ねえ、起きてよ……！」

ゆさゆさと慧の肩を力なく揺する。それでも一向に反応しない慧に、とうとう埜亜は感情を爆発させた。

「……っ、起きなさいよ！ いつまで寝てるの！？ お願い……お願いだからっ……私を独りにしないでよおっ！！ 起きてよ……！！」

揺れる力がどんどん強くなっていく。激しく音を立てて軋むベッドのスプリング。腕に刺さった点滴が外れかけ、慧の衣服が乱れる。

「の、埜亜ちゃんっ。落ち着いて」

「どうして落ち着いていられるのよ!!!」

紫紋の制止の声を遮って埜亜は叫んだ。振り返ったその顔は涙にまみれ、何かに取り憑かれたような鬼気迫る形相だった。慧の肩から手を放し、紫紋のシャツを掴んだ。

「慧が……慧が起きないのにつ……どうして紫紋君は落ち着いていられるの!? 落ち着いたら慧が起きるの!? どうしてよ!? どうして、どうして……!」

「埜亜、ちゃん……」

ひつく、ひつくとしゃくり上げる声だけを漏らして、埜亜は縋り付くように紫紋の胸に顔を埋めた。紫紋のシャツに大きな涙の染みがどんどん増えていった。

(俺が、あの時あんなことを言わなければ……)

紫紋は独り、胸の中で自分を呪った。自分の軽はずみな一言が、親友二人の人生をこんなにも狂わせてしまった。出来ることなら、今すぐにも自分が慧の身代りになってあげたかった。

「……ん……さい……」

「え?」

ふと、紫紋の胸の中で悲愴に沈む埜亜が何かを呟いた。

「ごめん……なさいっ……!」

「っ!」

「私が……わたし、がっ……待ち合わせなんて、言わなければ……」

! 私のせいじゃ……! ごめんなさい……慧、ごめん……、ごめ

ごめ、ん、なさい……っ」

( 違う! )

それは、禁句だった。埜亜が自分を責める必要など一寸たりともありはしない。紫紋は、それ以上埜亜が自虐する言葉を聞きたくなかった。

「埜亜っ!」

「え んむうっ!?!」

呼び捨てにされたことで顔を上げた埜亜の目が更に驚愕にまどか

を描く。あろうことか、紫紋は埜亜の唇を強引に奪ったのである。紫紋も理性のタガが外れかかっていた。それしか咄嗟の方法が思いつかなかったのだ。

「んっ！ んーっ！ ん……っ」

はじめのうちは抗っていた埜亜だが、すぐに身体中が弛緩していった。瞳を閉じて、埜亜は紫紋の腕に抱かれたまま大人しくなった。やがて、唇が離れる。

「……紫紋……くん？」

いづらか落ち着きを取り戻した埜亜が、心底不思議そうな顔をして紫紋を見上げていた。どこか焦点の合っていない目。

（たとえばどんなに醜い傷の舐め合いだとしても）

「……俺が側にいるから」

（それで、この子が少しでも救われるのなら）

「俺が埜亜の心の孔を埋めてやる。だから……一緒にいよう」

不謹慎だろう。不誠実だろう。紫紋はすぐ側で眠っている親友を裏切ったのだ。

それでも。

その尊い罪を。いつたい誰が笑えるというのだろう。

埜亜はしばらく茫然とした様子で視線を彷徨わせて。

その言葉に、静かに頷いた。

尊罪。(後書き)

……まあありがちな三角関係の出来上がりです。改めて見返してみると、やはり恥ずかしいものです。まあ、まだ半分も終わっていないので、宜しければ最後までお付き合い下さい。

## 嘘 (前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の ( ) で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ ≪≫ で書かれている部分は傍点 (強調)

嘘。

埜亜は、一応三年間で高校を卒業できた。慧のいない学校は苦痛以外の何物でもなかったが、独りでいるのはもつと怖くてただ惰性で通い続けた。その姿は昔の いじめを受けていた頃の埜亜を彷彿させた。卒業アルバムの集合写真を見ても、当然その中に慧の姿はなく、埜亜は一度もアルバムを開いたことがなかった。進学する気にもなれず卒業してからは、近所のコンビニエンスストアでアルバイトをしつつ、慧の見舞いを続けていた。

そして、事故からちょうど三年後の十二月二十四日。前日までは温かかったのに、この日に限って思い出したかのように雪が舞っていた。それは埜亜に嫌でも当時のことを思い起こさせ、胸を痛い程締め付けた。

バイト帰り。いつものように慧の病室に行くと、ドアのところにステッカーが引っかかっていた。

「面会謝絶……」

目を疑った。そこには確かに『面会謝絶』の四文字。最悪の予感が埜亜の脳裏に飛来した。

「章田さん」

それが自分の名前を呼んだのだと気付くまでに二秒かかった。振り返ると眼鏡をかけ白衣を着た四十代後半の男性が立っていた。

「岩代先生……」

慧の担当医、岩代医師だった。三年間も病院通いをしていた埜亜とは当然顔見知りである。いつも眼鏡の奥に柔和な笑顔を浮かべている彼の顔はしかし、今日に限ってかつてない程に厳しい。

「白神くんのことでは話があるんだ。少しいいかな」

そう言っ岩代医師は慧の病室から離れ、隣の病棟にある医局へと埜亜を案内した。慧の話とあっては行かざるを得ない、埜亜は黙



つて後ろをついていった。

「座つて」促されるままに椅子に座る埜亜。岩代医師は自分のデスクの椅子に深く腰掛け、疲れたように大きく息を吐いた。

「何か飲むかい？」

岩代医師の質問に、埜亜は首を横に振るだけで応えた。とてもそんな気分ではない。極度の緊張と興奮で、何か口に入れば途端に吐き出してしまいそうだった。

岩代医師は、もう一度細く長く息を吐き出すと。

「単刀直入に言おう。……白神くんが目を覚ました」

「っ！！」

ガタツ  
！

弾かれたように立ち上がる埜亜。椅子が倒れる音はそう大きくなかったが、静寂に満たされた医局の中に於いて驚くほどやかましく響いた。立ちくらみだろうか、視界が一瞬揺らいだ。

埜亜の心臓が早鐘を打つ。目覚めた？ 彗が？

「落ち着きなさい。気持ちは分かるが、君がそんなことでどうする」

「す、みま、せん……」

自分で自分の声に驚いた。尋常ではない震え方だった。

埜亜は震える両手で椅子を起こして その行為にすら数秒かかったが それに座った。岩代医師はしばらく黙っていた。埜亜が落ち着くのを待っているようだ。

五分か十分。実際に経過したのはそのくらいの短い時間だったが、埜亜には数時間にも永遠にも長く感じられた。徐々に落ち着きを取り戻してきたのを見計らって岩代医師が口を開く。

「今日の未明なただけだね。さっき言った通り、白神くんが意識を取り戻したんだ。それはびっくりしたよ。今だから言うけどね、彼はもう目覚めないのではないかとさえ僕らは思っていたんだ」

医者を目線で言えば、それは死者の蘇生にも近い奇跡だと。岩代医師はそう語った。

「勿論諦めていたわけではないよ。意識を取り戻したのは僕として

も素直に喜ばしい。……ただ、ね。今度は別の問題が発生してしまつたんだ」

「別の……問題？」

間抜けのように言われた言葉を言い返す埜亜。既に正常な思考能力は残っていないかった。次にどんな言葉を浴びせられるのかと思うと気が気でなかった。

「章田さん。落ち着いて、聞いて欲しい」

一言一言、赤子に言い聞かせるように重々しく口を開く岩代医師。埜亜の喉がごくりと音を立てた。そして。

「彼は、記憶喪失に陥っている」

今度こそ、埜亜の思考は完全に凍結した。

「本来、医学部に『記憶喪失』という単語は存在しないんだけどね、他に相応しい言葉が見当たらないから使わせてもらうよ。要するに、だ。今の白神くんは？過去の記憶が全くない状態？なんだ。自分の名前も覚えていなかったし、事故に遭ったことも記憶にない、当然だけど君のことも覚えていない。でも、ここが病院だ、とか、季節が冬だ、などという風に、？物事を常識として認識する能力？は残っている。だから過去に車に轢かれたということも説明すれば理解できるし、事故から三年が経過しているという事実も、思いの外スムーズに受け入れてくれたよ」

岩代医師の口から次々と言葉が紡がれる。事実、彼はゆっくりと語りかけるように喋っているが、埜亜の耳にはカセットテープを早送りで再生した時のような音程度にしか認識できなかった。まるで異国語。

「もう一度言うよ。《今の白神くんは、記憶を失っている》」

「っ！」

埜亜の全身を電流が駆け抜けるような感覚が走った。それは、思

考の解凍。岩代医師の言葉を脳内で反芻する。

( 慧が、記憶を、失っている ? )

今度は理解した。理解できてしまった。理解はできていても実感は全く湧かなかつた。さあっと血の気が引いていくのを感じる。頭の中が冷たい。今立ち上がったらすぐさま倒れてしまいそうだ。バクバクと何かが煩い。自分の心臓の音だった。ガチガチと何かが煩い。自分の奥歯の音だった。

岩代医師はみたび、大きく「ふーっ」と息を吐き出すと。

「三日間、時間をあげよう。彼と会うか、会わないか。どっちみち僕らも検査で大忙しだしね。君としても、今の恋人のこともあるだろう。よく考えて、決めなさい」

「……………」

「……………話はこれでおしまいだ。今日は、もう帰りなさい」

それきり、岩代医師は口を嚙んだ。埜亜に出来ることは言われた通り、ただ機械的にこの部屋から出て行くことだけだった。夢遊病者のようなふらふらと頼りない足取りで医局を辞す埜亜。

病院を出ると、外は真つ暗だった。

街を彩る赤、緑、黄色、……………白。トナカイの鼻、クリスマスツリー、イルミネーション、……………雪。行き交う人は誰も楽しげで、笑顔に溢れていた。

現実はどこまでも夢のようで

残酷だった。

三日後。

埜亜は医局にいた。

岩代医師はとりわけ驚いた様子も見せず、ため息を一つつくと。

「三時間。それ以上は患者の身体に障るからね。三時間経ったら呼びに来るから、それまでは好きにしていなさい」

そう言って、慧の病室の前まで案内するとその場を立ち去った。

「……………」  
覚悟は、してきた。埜亜は深呼吸とノックを一つすると病室の扉を静かに開いた。

彼はベッドで半身を起こして埜亜の方を見つめていた。懐かしささえ憶える彼の顔。しかしかつて埜亜に向けられていたそれとは程遠い、戸惑いがちの表情。今の彼の瞳に映っている自分は、最早『知らない誰か』でしかなかった。第一声はこうだった。

きみは、だれ？

\*

埜亜はただひたすらに涙を流していた。時折漏れる、殺していた嗚咽が耳に痛々しかった。手はまだ替の手を握ったままで、ぎゅつと握っていたために爪が深々と食い込んでいた。

「私は……私は……っ、わたし、は……！」  
震える埜亜の声。嗚咽に混じったそれは、注意深く聴かなければ声だと判別できないくらいにぐしゃぐしゃになっていた。

「わたしは……、ううっ……今でも替が好き……、一番大好き……  
……っ！ わす、れるっ、なんて、ぐすっ……できないよお……  
……」

埜亜の想いは、三年前のあの日に留まったままだった。熱く迸る情熱は、今も彼女の胸の中で滾っている。

ただ。

「……………」  
「……………」

ただ、それを受け止める器だけが、ない。

「見ず知らずの人に突然そんなこと言われても、困るよ……」  
替の一言が痛かった。

他人に対する言葉が痛かった。

あんなに聞きたかった声が、今では狂うほど痛かった。

「うううっ……、うあ……うわああああん………！！！」

嗚咽は慟哭へと昇華し、静かな室内を満たす。埜亜は両手で顔を覆って息つく間もなく泣き叫んだ。

奇しくも、それはあの日のゴンドラのよう。

コンコン。

ドアをノックする無機質な音。一拍おいて、扉が開いた。

「……すまないけれど、そろそろいいかな。これ以上は患者の身体に障る」

埜亜の泣き声は外まで漏れていただろう。岩代医師は埜亜の肩にそっと手を置いて事務的な言葉を述べた。

ちょうど三時間が経過していた。

「……つく、……つく、……つく、……」

次第に小さくなる埜亜の声。何分、そうしていただろう。慧も岩代医師も何も言わず、沈黙に支配された病室の中で時計の秒針だけが無機質なメロディーを奏でていた。

そしてゆっくり静かに、しかし唐突に埜亜が立ち上がった。

「……ごめんなさい」

その言葉には、感情というものが一切含まれていなかった。そして、表情にも。泣き腫らしてこそいたものの、埜亜の顔には一切の感情というが欠如していた。

まるで、心の扉を固く閉ざしてしまったかのように。

「もう、ここには、来ないから」

止水のような一言を残して、埜亜はそっと病室から出て行った。

さようなら、はなかつた。けれどそれは、この上ない別離の言葉。慧に対して。そして自分自身に対して。

「……」

「……」

慧は黙って自分の掌を見つめていた。さっきまで埜亜が硬く握り締めていた手。残っていた温もりはエアコンのぬるい風にさらされて霧散してしまった。食い込んだ爪の痕をじっと見つめる慧。

ふと、岩代医師が口を開く。

「……本当に、あれで良かったのかい？」

「……………」

「慧は応えない。岩代医師は「ふう」と息を吐いて。」

「本当は、《全部覚えているんだろう》？」

## 嘘。 (後書き)

一度目の『転』を受け『承』に戻り、ここで二度目の『転』になります。果たして慧の本心とは……？ てな感じで今後お送りしたいと思います。宜しくお願いします。

## 涙色。(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・《 》で書かれている部分は傍点（強調）



## 涙色。

慧の脳に、欠陥は何一つなかった。脳波の乱れもなければ傷があるわけでもない。何も知らない第三者から見れば、三年間も昏睡状態にあったことの方が信じられまい、それくらいに慧の脳は健全そのものだった。つまり、記憶を司る中枢にも《異常などはじめからなかったのだ》。

三日前、まだ黎明には遠い時間。静寂のナースステーションに突然コール音が響いた。ナースコール。発信元は慧の病室である。僥倖にも当直医であった岩代医師と数人の看護師は取る物も取り敢えず慧の病室へと急行した。

扉を開いた岩代医師らが目撃したものは、ベッドからずり落ち、文字通り床を這って外へ出ようとする慧の姿だった。ろくに動かすことも出来ない身体を必死に動かし、呻き声を上げながら外を目指す慧。

「白神くん！ 落ち着きなさい！」

岩代医師は慧を押さえつけるように止めにかかると同時に、混乱する慧を落ち着かせようと声を荒げるが。

「放せっ！ 埜亜が……埜亜があ……！」

弱りきった身体で、それでももがき抵抗する慧。静止の声も届いていないかのようにだった。腕を振るい足をばたつかせ、力を振り絞って暴走を続ける。その間、慧はずっと埜亜の名前を叫び続けていた。尋常なパニック状態ではなかった。しかしどれほど足掻いたところで衰弱した今の慧が大の大人の力に敵うはずもない、ようやく暴れるのをやめたのはそれから一時間も後のことだった。

「……落ち着いたかい？」

「はい……申し訳ありませんでした」

それから更に三十分後。破れたシーツを交換し、乱れた掛け布団

を直し、散らばったゴミ箱や零れた点滴を掃除し、夜中に突然何事かと慧の病室に集まった野次馬達を押し返した後である。今室内にいたのは、岩代医師とベッドに横たえられた慧の二人だけだった。騒動が鎮静したところで岩代医師が、他の人間を退室させたのだ。いずれにせよこの時間からでは詳しい検査は行えない。それより現状の段階では休息が最優先だと判断したのだ。慧が車に轢かれたこと、事故から三年間眠り続けていたことを簡単に説明すると。

「とりあえず、今は休みなさい。眠れないようならこの睡眠薬を使うといい。次に起きたら色々と精密検査があるだろうから、準備しておくよ。釘を刺しておくけど、しばらくは絶対安静だからね。くれぐれもベッドから出ないこと。……もともと、身体が動かないだろうけれどね」

「……………」

岩代医師の忠告に対し、慧からの返事はなかった。事ここに至って、本人に聞く気があるかないかはあまり問題ない。どっちみちあれだけ激しく暴れた後に動けるような体力が残っている身体ではないのだ、今の慧は。

「それじゃあ、ゆっくりおやすみ」

そう残して、岩代医師は部屋を後にしようとした。その背中に。

「岩代先生」

静かに　しかしはつきりとした声がかかった。

岩代医師の足がびたりと止まる。すぐさま異変に気付いた。おかしい。慧にはまだ自己紹介はしていない。名札も宿直室に置いてきたままだ。

「……………」

……………どうして、僕の名前を？」

その問いにすら応えず、慧は。

「埜亜と紫紋は、付き合っているんですね？」

強い確信を持った声で、断言した。

「……………」

……………何故それを知っている？

薄ら寒さを覚えた。ベッドの方を見やると慧は天井を見上げていた。そこに表情はなく、どんな感情も読み取れなかった。

「見えていたんです、聴こえていたんです、全部。俺が眠っていた三年間もずっと。間違いなく眠っていたけれど、意識だけはどこかで起きていたんです。だから……埜亜と紫紋が今付き合っていることも……全部知ってます」

「そんな……莫迦な……」

岩代医師は驚きを通り越して半ば呆れてしまった。表層意識は眠っていても、深層意識は覚醒していたとでもいうのか。確かに、臨死状態にいる患者に家族の声が届くという話はよく耳にするが、それは本当に奇跡のような条件が重なって起こる超常現象めいた一瞬の出来事のはず。それが三年もの間継続していたというのだ。医者にとつて『奇跡』などという単語は禁句である、それは最早医学ではなくオカルトの分野に入る。

しばしの沈黙。岩代医師は落ち着きなく髪の毛をかいたり所在無く手を白衣のポケットに入れたりしていたが、慧はずっと無表情を崩してはいなかった。横顔はひどく大人びていて、さっきまであれほど暴れていたのと同じ人物とは思えない。その目で何を見据えているのだろう。何もない虚空だった。まるで、悟りを開いた賢者。何かを諦めたような、そんな虚ろな顔だった

やがて、口を開く。

「先生。お願いがあります」

\*

そうして、慧は記憶を失った？フリ？をした。

それは

「……俺は、今はこんな身体です」

備え付けのチェストの上に置かれた、水の入ったコップに手を伸ばす慧。

しかし、慧の手がそれを掴むことはなかった。衰え果てた慧の手

は『コップを掴む』という簡単な動作さえ満足に行うことが出来ず、震える指先が接触したことでバランスを崩したコップは床に落ち、水が零れる。

それは、全て

「自分の力で、喉を潤すことも出来ないんです。今の俺には」  
無機質な声。諦め切ったような冷めた声だった。

「トイレに行くことも出来ない。箸だって持てない。そんな俺が、  
埜亜の側にいる資格なんてないです。むしろ邪魔でしかない」

埜亜の 恋しい人のことを誰より想ったこと

「アイツになら……紫紋になら、埜亜を任せられる。こんな役立たずな俺なんかより、ずっと埜亜のことを幸せにしてやれるんです」  
そこには

「だから、これでいいんです。これでいい……」

白神彗という男の、不器用すぎる優しさしか、ないはずだから

岩代医師は肯定も否定もしなかった。否、出来なかったのだ。それは医師の仕事でもなく、ましてや岩代という一個人から見ても何か言えるような状況ではなかったのだ。白神彗、章田埜亜、佐々賀紫紋。複雑すぎる三人を三年間もの間見続けてきた彼は『中庸』を頑なに守り抜いてきた。それが彼の信条。そうしなければ、医者としての自己を維持できない。患者とその周囲に対して親身に、かつ深入りしすぎずに。長年多くの主治医を請け負ってきたベテラン医師・岩代の、いつからか培ってきた自衛本能だった。

「これで……良かったんですよ……これ、で……」

しかし、今回ばかりはこう思わざるを得ない。

『なんと悲しい男か』と

誰が悪いわけでもない。彗は悪くない。埜亜も悪くない。紫紋が悪いわけでもない。ましてや、三年前に彗を車ではねた人間が完全に悪いということもない。本当に、誰も悪くないのだ。

ただ、ほんの少し、ちょっとだけ

みんなが、シアワセの見つけ方が上手でなかっただけ

。（これで、良かったんだ）

慧の口から、それ以上の言葉は発せられなかった。右手で三年間伸び続けた前髪をくしゃ、と乱雑にかき上げる。そしてそのまま片手で顔を覆った。……岩代医師からは、歯軋りをする慧の横顔がはつきり見えてはいたが。

喜びも。

怒りも。

哀しみも。

楽しさも。

全て、ここに置いて。

（だけど、ごめん、埜亜）

道化は、どこまでも道化らしくあろうと。

床に零れて出来た水溜りはひどく透明で、まるで

（今だけは）

涙は、止めようがないよ

翌日から慧の身体のリハビリが始まった。

岩代医師はせめてもう数日間の休息を薦めたが、慧の強い希望で半ば強引に始められたのだ。

まずは腕の機能の回復。掌を開いたり閉じたりが自在に出来るようにすることから始まり、肘、肩の関節の筋肉を順に取り戻していった。それが進むと、次は下半身。手すりに掴まっつての歩行訓練。慧は何度も倒れた。最初のうちは一歩目さえ踏み出せなかった。それでも何度でも立ち上がった。立ち上がってはまた倒れる。血を吐く思いでリハビリを続けた。気絶してドクターストップがかかった

のも一度や二度ではない。日に日に青痣が増えていった。

それが終わると、今度は脳のリハビリ。幸いにもこちらの機能は全くと言っていい程低下していなかったもので、とにかく速く・多く・正確にやるように心掛けた。両親が休学扱いにしていた高校にも、退院すると同時に復学する手筈を整えてもらっている。無事卒業できた後は医学部のある国立大学を志望校一本で受験するつもりだ。それ以外にも、独学で医学の専門書を購入し、二日に一冊を読破する程のハイペースで勉強に勤しんだ。『医者になる』という漠然とした慧の将来のビジョンは、皮肉にもこの一件で慧の心の中で確固たるものになった。一日の平均睡眠時間は二時間だった。

幾晩、眠れぬ夜が続いただろう。幾度、涙を流しそうになっただろう。どこを目指し何を求めていたのかすら、もう霧の只中だった。埜亜に逢いたかった。紫紋と話したかった。二人に、謝りたかった。それでも、慧は一度たりとも心の内を明かしはしなかった。リハビリを休んだことは一日たりともない。決して『辛い』と口にすることもなかった。涙を流すこともなかった。そんな弱さはもう赦されないのだから。喜びも、怒りも、哀しみも、楽しさも、全てあの日に置いてきたのだから。

そうして、慧は退院に向けて驚異的なスピードで邁進していった。最低でも三ヶ月、と言った岩代医師の思惑は見事に外れ、二ヶ月弱で松葉杖なしでも生活に必要な最低限の運動は出来るようになった。二月某日。慧の退院の日が三日後に決まった。両親がおめでとう、と言った。看護師達が一同口を揃えておめでとう、と言った。岩代医師はおめでとう、とは言わなかった。元気で暮らさない、その一言だけが見送りの言葉だった。そして、最も祝福してほしい女性はそのこにはいない。

退院当日。家族には荷物だけ持って帰ってもらい、最後は独りで帰らせてもらうよう頼んだ。そして宣言通り、埜亜が顔を見せることは最後までなかった。病院を背に歩き出す慧。やけに寒さが身に染みた。冬の空気とはこんなに冷たかっただろうか。あの初詣の日

でさえこんなに冷たくはなかった。当然だ。あの時、隣には埜亜がいた。今は、いない。空を見上げて吐いたため息は、一瞬白く煙ってすぐに消えた。

独りだった。それは自分が選んだ道。茨の道かもしれない。愚か者が辿る道かもしれない。されど後悔はない。歩みは止めない。ただひたすらに、愛した彼女のシアワセだけを希う。

そうして、慧が病院を退院した日。

埜亜が車に轢かれた。

涙色。(後書き)

慧の心中が明らかになります。どうも、月織はこういう不器用な男が好きのようです。そして、それが解決したかと思いきや……!？ふとしたラストに目を疑うかもしれませんが、今後の展開に乞うご期待、ということまで。



## 道化。(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・《》で書かれている部分は傍点（強調）

## 道化。

「はっはっはっ……はあっ……、っ、あ、はっ、はっ……！」

\*

一步を踏み出す度に軋む両足。慧の身体は、まだそんな過度の運動を乗り越えられる程回復はしていなかった。それは慧本人が一番自覚している事実。冬の空気が喉に響く。激しくむせた。それでも前へ。絶対に立ち止まることはなくただ走り続ける。荒れる吐息はまるで狂犬。さあ踏み出せと本能が叫ぶ。

何事かと誰もが道を空ける。恐ろしくて非難の声すら浴びせる者もない。「廊下は走らないで」そう注意しようとした白衣の女性でさえ、慧の迫力に圧倒されて押し黙った。当然だ。今の慧は明らかに尋常ではなかった。血走った顔に滝のような汗。海を割る伝説の再現、しかしそこを行くのは賢者<sup>モトセ</sup>ではなく一人の道化である。

そして、ようやく慧の足が止まる。酸欠で眩暈が止まらない。もういいだろう休ませると、身体が休眠を要求するが、それでも両の眼に残る力の全てを集約させてその二文字を捉える。

『医局』

もう二度と訪れることはないと思っていた場所。三年と二ヶ月、ここが慧の仮初の家だった。良い思い出は皆無の、ひどく冷たい家ではあったが。

ドアノブに手をやる。届かなかった。手が上に上がらない、とうか動かない。既に疲労がピークに達しているのだ。足も最早慧の体重を支えているだけの二本の棒に成り果て感覚が乏しく、今では自身の一部であることの方が疑わしい。頭はずしりと重く視界は赤一色に染まっている。

それでも前へ。三十センチ上に伸ばすくらいどうした。自分を待っている人がいるのだ。さあ動けと野生が吼える。

疲労からか緊張からか。震える手。届いた。ノブを回す。力の限

り押す。重い扉をこじ開けた。

「……いらつしゃい、白神くん」

白衣の男性　岩代医師は慧の顔を見ても表情を一切変えることなく慧の来訪を出迎えた。ただ疲れたように細い息を吐き出すだけ。心なしかやつれて、白髪も若干増えているようにも見えた。

岩代医師は慧の元までやってくと無言で肩を貸した。

「疲れたろう。ほら、掴みなさい」

柔和な笑みを浮かべて慧を促す。身体的疲労が臨界をとうに突破していた慧は、ほとんどの体重を岩代医師に預けて椅子を目指した。  
(重いな……)

心の中で呟く岩代医師。実際は痩せこけて成人男性の平均体重よりは随分軽い身体だというのに。

いつもの丸椅子ではなく、岩代医師が使っている背もたれ付きのデスクチェアに誘導される。遠慮する余裕もなく、力を借りてそこにくずおれる慧。随分使い込んでいるのか、大分年季が入っている。錆付いたスプリングが、ぎし、と音を立てた。

「落ち着いて。ほら、まずは深呼吸だ」

そう言われて、慧はさつきから呼吸をすることを忘れていたことによくやく気付いた。

一回。

二回。

三回。

酸素が全身を巡り、背筋がじんと痺れるような感覚。脳が活性化し、次第に収まっていく慧の荒い息。

「……大丈夫かい？」

「……はい……」

そう返答をして慧は思わず咳き込んだ。猛烈な喉と肺の痛み。横隔膜も弱まっているのだ。そんな状態で寒空の下を全力疾走してきたのだ、一歩間違えれば肺炎になりかねない。声もひどく嘎れていて、ガラスを引っ掻いたような耳障りなノイズしか出せなかった。

岩代医師は黙って席を立ち、医局の奥から紙コップを持ってきた。中身はよく冷えたミネラルウォーターだった。慧は一息で飲み干した。勢い余って口の端から線になって零れたが、気にする余裕もない。熱い身体に冷たい水が浸透していくのは、えも言われぬ快感だった。

「大丈夫かい？」

「……はい」

同じ問いに、今度はしつかりと返事が出来た。大丈夫だ。落ち着けと自分に言い聞かす。

「まったく……昨日退院したばかりの患者にこんな形で顔を合わせることになるなんてね。僕も医者をやって長いけど、流石にはじめてだよ」

「岩代先生、埜亜は……」

冗談めかして言う岩代医師だが慧は全く笑えない。急かすように本題に移ろうとする慧。

「……そうだね。世間話をしに来たんじゃあないからね」

コホンと咳払い一つ。医師としての神妙な顔つきになって慧に向き合う岩代。

「概ね、さつき電話で話した通りだよ。……昨晚、章田さんが車にはねられたんだ」

ドクン。断末魔を上げるかの如く大きく跳ねる心臓。今さつき飲んだ水が逆流して吐き出してしまいそうになった。

（埜亜が、車に、はねられ……た）

三十分前の話である。慧の自宅に岩代医師から悪夢のような電話がかかってきた。

バイト帰りの埜亜が軽自動車にはねられたという。信号のない交差点で、まともに左右を確認しなかった埜亜が横断歩道を渡ろうとしたところに車が突っ込んできたのだという。目撃者のサラリーマンの話によると、轢かれた女の子はかなり疲れた様子で足元も覚束ない感じだったらしい。もっとも、刑法の上ではこの場合も運転手

に過失があると見なされるのだが。

さておき。慧の頭で理解出来たのは『章田埜亜が交通事故に遭った』『被害者の命に別状はない』『今すぐ病院まで来て欲しい』の三点だけだった。そして取る物も取り敢えず、自分の身さえ顧みず、慧は満足に動かない身体に鞭打ってここまで駆けてきたのだ。「すまない、本当はもっと早くに連絡したかったんだけど忙しくてね。医者として、患者さんの家族よりも優先するわけにもいかなかったしね。繰り返すけど、命に別状はないから安心して欲しい。幸いスピードもあまり出ていなかったおかげで、怪我也打撲と擦り傷程度で済んだ。君の時とは違い、もう目も覚ましているよ。三日もあれば退院できるだろう」

改めて言われて、ほうと心からの安堵の吐息を吐き出す慧。

（良かった……ちょっと不幸が重なったけれど埜亜は無事で、もうすぐ俺も埜亜も元の生活が返って）

ようやく生きた心地がしてきた。長時間全身を奔っていた極度の緊張が解け

待て。

（元の生活？）

辻褄が合わない。なら何故、《岩代医師は慧に病院に来てくれるよう頼んだ》のだ？

慧と埜亜の事情を知っている人間がとる行動とは思えない。埜亜が事故に遭ったことを慧に伝えるのは道徳的に間違っていないが、そうすると病院に呼び出す理由が分からない。電話で要件だけ伝えれば良い話だ。落ち着いた頭で組み立てた慧の論理はまさに的を射ていた。

「せんせい……」

慧の思考を先回りしていたように、重々しく苦々しく口を開く岩代医師。

「……白神くん。これから言うことは君に大きなショックを与える。よく、落ち着いて、聞きなさい」

「ぐくりと唾を呑む慧。そして。」

最悪の可能性は、果たして的中した。

「章田さんは、記憶を失っている」

70

世界から音が消えた。

慧の手を滑り落ちた紙コップだけが、その存在を主張していた。

\*

『予め言っておくけれど、君の時と違ってこれは嘘じゃない』  
知っている。

白神慧の頭に平時の冷静さなど微塵も残っていなかった。

『信じるかどうかは君が決めればいい』

そんなことをする意味がない。

視覚も聴覚も、あるいは正常でなかったかもしれない。

『今の章田さんは？過去の記憶が全くない状態？だ。自分の名前も覚えていない、事故に遭ったことも記憶にない、家族はおるか君のことも分からない。でも？物事を常識として認識する能力？は失わ



れていない。 ああくそ、似たような説明を少し前にもしたな…

…」

専門書で読んだ内容と全く同じだ。前者を『エピソード記憶』、後者を『意味記憶』と称する。

この時珍しく、岩代医師が苛立たしげに髪を掻いたのが印象的だった。

『ともかく、今の章田さんの心は？虚無？だ。いいかい白神くん。このために君を呼んだんだ』

そしてその時、続く言葉を俺は確信していた。

『《やり直すなら今だぞ》？』

俺は 。

コツ、コツ、コツ。

リノリウムの床を靴が叩く音が響く。

遠くで子供の泣き声。遠くで患者同士の笑い声。遠くで看護師が老人を叱り付ける声。

全てが、遠い 。

やり直すなら今だぞ

(……俺は)

コツ、コツ、……ッ。

慧は立ち止まる。

一つの扉の前で。

ノック。数秒待つ。

「……誰？」

中から、僅かに怯えを孕んだ声が聞こえた。

だけど、慧がずっと聴きたかった声。間違えようのない、聴き逃しようのないといつかのあの日理由もなく信じた声。

「……………失礼するよ」  
そう断って慧は扉を開いた。  
彼女はベッドで半身を起こして慧の方を見つめていた。懐かしさ  
さえ憶える彼女の顔。しかしかつて慧に向けられていたそれは程  
遠い、戸惑いがちの表情。今の彼女の瞳に映っている自分は、最早  
『知らない誰か』でしかなかった。第一声はこうだった。

あなた、だれ？

\*

S U I

「っ……………」

声って、不思議だな…………。

かつてあんなに近くに感じたのに、今じゃどんなに手を伸ばしても掴めない。

言葉には魔力がある、なんて昔の人の言葉。今なら信じてやるよ。  
覚悟は……………してきたつもり、だったんだけど……………。

結構 いや、かなり、堪えるもんだ……………。

俺は、こんな絶望を埜亜に与えてしまったのか……………。

それでも埜亜、きみは……………。

今は知らない愛しい人を見つめる。

髪、切ったんだな。長くて綺麗なポニーテールだったのに、勿体  
無い……………。

でも、今の髪型もすごく似合ってるよ。本心からそう思う。ほら、  
俺は昔からお世辞とか苦手だったろう？

……………なあ、埜亜。

頼むよ……………。

……………何か。

何か言ってくれよ……………。

俺の名前を……………呼んでくれ。

……いや、やっぱり何も言わないでくれ。

今のきみから、知らない誰かに向けられる声は聞きたくない。

やり直すなら今だぞ

やり直す、か……。

そうだな……道化は、最期まで道化らしく。

「……出逢いは、些細」

今は、お前に倣うとしよう。

せめて、同じ痛みを共有出来るように。

せめて、それがささやかな贖いになりますように。

道化。(後書き)

バッドエンドまっしぐらっばいこの小説この章ですが、一応今はこのまま傍観しておいて下さい。当をはじめて一人称体に視点が変わりますが、月織の作品ではよくあることで、むしろ視点が変わっていることが明記されている分、ある意味異色な部類ではあります。まあ、これからコロコロ変わりますが、その都度誰視点なのかが明記されているので、分かり易いとは思いますが。

消えない想い。(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・《 》で書かれている部分は傍点（強調）

消えない想い。

\*

「入学式で初めて会って……。今にして思えば、俺はあの頃から埜亜のことが気になってたんじゃないかな」

「そうそう、クリスマスに遊園地にも遊びに行ったんだ。埜亜は絶叫系にばかり乗りたがるもんだから大変でさ……」

「初詣の時は驚かされたよ。なんたって埜亜、真つ赤な振袖着てきたんだぜ？ 髪の毛も下ろしてたし……。ああ、当時の埜亜は髪長くてポニーテールがトレードマークだったんだよ」

「俺の幼馴染で佐々賀紫紋っていう大馬鹿野郎がいるんだけど、そいつと会った時の埜亜の反応が、また傑作で……」

「それから……。それから……」  
これまで淀みなく喋り続けていた慧の口が急に止まった。

そこから先に、明るい未来はない。埜亜に、これ以上の哀しみや絶望を味わわせることだけは絶対にしてはならないのだ。

（だって……）  
最初のうちこそ警戒していたものの、慧の話の聞いている間の埜亜はとても楽しそうに笑っていて。  
分かってしまったから。

（埜亜には、笑顔が一番似合うのだから）  
「……私、羨ましい……」  
「え……？」

ずっと話を受ける側だった埜亜が、沈黙を埋めるかのように口を開く。

「とても……とても楽しそうです。その頃の私が、楽しいことをたくさん知っている私が、私はどうしようもなく羨ましいです」

目に見えない記憶に想いを馳せる埜亜。その向日葵のような穢れなき少女の横顔は慧の胸を痛い程締め付けた。

「白神さんのこと、もっと深く知りたい。ううん、知っていたことを思い出してあげたい。……私と白神さんは、仲が良かったんですよ」

ある種の稚さすら憶える埜亜の表情。

「ああ……すごく、ね」

「そっかあ……。……白神さん、一つ、訊いてもいいですか？」

「なに？」

真剣な表情で慧を真っ直ぐに見つめてくる埜亜。思わず目を逸らしそうになった。でも逸らせない。吸い込まれるような深く黒い瞳はかつてと何も変わらない。慧は今でもその魔眼の虜なのだから。

「私と白神さんは……付き合っていたんですか？」

「」

ずきり、と心臓に鋭い刃が突き刺さる。動揺を表に出さぬよう耐えるのに必死だった。今の埜亜にしてみれば、何ということはない純粹な質問。正面から向き合わなければいけない。

慧は首を振った。

横に。

「……いや、それは、ないよ」

声が震えそうになった。だが震わすものか。腹筋にありつただけの力を籠める。涙を流しそうになった。だが泣くものか。眼窩で荒波を塞ぎ込み外に出させない。突き刺さった刃が心を大きく抉る。だから心を凍らせた。そうすれば痛みなんて感じない。

「埜亜には悪いけど、俺はそんな目で見たことはないし、埜亜もきつと同じだったと思うよ」

それが、慧の出した答え。また一からやり直す。終わらせるために。そう、この恋を終わりにするために。今度は二人の気持ちは交

わらない。埜亜が退院すると同時に、慧は彼女の前から姿を消す。慧の永遠の片想いで終結するのだ。それが、導き出された最善の未来。

「そうですか……。残念だな。私、白神さん結構タイプなのに。……って、何恥ずかしいこと口走ってるんですかね私。ごめんなさい、忘れて下さい。あははは……」

僅かに頬を染め、渴いた笑みを浮かべる埜亜。

やめてくれ。

慧は狂いそうになった。埜亜のそんな弱々しい笑みは見たくなかった。気紛れでくそつたれな万能の神様。もういいだろう。埜亜をもう解放してやってくれ。埜亜に降りかかる不幸なら、俺がいくらでも代わりに背負ってやる。

「……じゃあ、俺はそろそろ帰るよ。早く退院できるといいな」

「はい。ありがとうございます。岩代先生が言っていました、退院の日程はもう明々後日に決まっています。だから大丈夫ですよ、ご心配おかけしてすみませんでした」

「いや……」

慧は曖昧に首を振った。

(謝らないといけないのは俺の方なんだよ、埜亜……)

「また、来てくれますか？」

だが神よ。業腹ながら一つだけお前に願う。

「……ああ。また、来るよ」

あと一度だけでいい、俺に最後のユメを見せてくれ

慧は席を立つ。今日去り、埜亜の退院を笑顔で見送ろう。それでお別れだ。

「じゃあな」

扉のノブに手をかける。それを。

「白神さん、一つだけ訂正させて下さい」

埜亜が強い自信を伴った声で呼び止めた。

「さっき、白神さんは『私にもそんな気はなかったと思う』って言





最後に、頭を打ちつけようと思いい切り仰け反った。自殺行為だ。この距離とこの勢いで堅い樹の幹に頭をぶつけたら裂傷どころでは済まない。脳震盪、打ち所が悪ければ頭蓋骨折で死に至りかねない。

「埜亜のため、埜亜のため、って……、偽善ぶりやがって……！」  
けれど、彗は止まらない。

「俺は……っ、何様だっただなああああああ……！！！！！」  
絶叫。次に響くであろう激突音はしかし、聞こえなかった。

すんでのところで、岩代医師が彗の肩に手をやって止めていた。静かに。だがそこには、一瞬で押し寄せては返す波濤にも似た力強さがあつた。

彗はようやく止まった。血まみれの両手をだらんと下げて、うつむいた状態で荒い呼吸を繰り返す。

岩代医師は何も言わない。

「せんせい……おしえてください……」

どさり、と膝が折れる彗。完全に体力の限界。地に跪いて天に救済を求める憐れな咎人がそこにいた。

雨が降っていた。やむことない、涙の雨が。

「俺は……おれは……っ、間違っていたんですか……！！！」

岩代医師は、何も言わない。

消えない想い。(後書き)

個人的には、もっというなら作者的には、慧が一番苦悩した場面だ  
と思います。実際書いている時からこの箇所には熱を籠めて執筆し  
ました。慧という男の在り方が、何よりも出ているシーンだと思っ  
ています。それが少しでも伝われば幸いです。

人として。 (前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の ( ) で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ ≪≫ で書かれている部分は傍点 (強調)

人として。

埜亜が母方の実家に引越すという。

\*

命に別状はない事故であったのはまさしく不幸中の幸いとしかないようがないが、それでも被害者やその家族に与えるショックはあまりにも大きい。ましてや、今の埜亜は『記憶喪失』という異常事態に陥っている。雑多な都会ではなく、自然に囲まれた閑静な片田舎で消耗した心身を療養することになったのだ。勿論一時的な処置で、機を見計らってこちらに戻ってくるそうだが。

慧がそれを聞いたのは三日後、即ち埜亜の退院の日である。特に驚きはなかった。むしろ安心した気さえする。実家までは車を走らせて四時間強はかかる。偶然街中で鉢合わせすることもなくなるのだから。

正午を回った。良い天気だ。憎たらしいくらい快晴。二月にしては暖かい。春はもうすぐそこまでやってきていた。

埜亜の父が車を病院の入口に待機させており、岩代医師にしきりに頭を下げていた。まもなく母親が埜亜を連れて出てくるはずだ。

慧は離れたところに一人きりで柱にもたれて天を仰いでいた。両手首から指先までを嚴重にギプスで固定され包帯でぐるぐる巻きにされており実に痛々しい。しかしそれ以上に顔が生気を失ったように土気色になっっている。隈も色濃い。当然だ、あの日以来一睡もしていないのだから。

それでも、最後の責務を果たしにやってきた。これで全て終わりにするのだ。埜亜と完全に別れ、この古巣にも二度と来ない。それで何もかも元通りになるのだ。

ただ、紫紋の姿がどこにも見当たらないのが気になった。慧が知る限り、埜亜の見舞いに来たという話も聞かない。彼はそんなに薄情な人間だっただろうか。慧の知っている佐々賀紫紋は普段はおち

やらけていて掴み所がない性格だが、いざという時は驚く程冷静で誰よりも義理堅い男だったはずだ。自分が眠っている三年間は親友の心さえ変えてしまったのだろうか。

「来ましたよ」

遠くで声。岩代医師の声だ。埜亜が出てきたのだろうか。慧は視線を入口の自動ドアのほうへやり、我が目を疑った。

白だ。

目を直射日光に晒し過ぎて目が眩んでいるのか。それとも睡眠不足による一時的な色覚障害だろうか。

数回瞬きをして目を慣らす。そうして改めて見ても、白はやはり白のままだった。

埜亜の髪が白いのだ。三日前も三年前も色素の薄い茶色っぽい色をしていたのに、今まさに病院から出てきた埜亜の髪は新雪のように真っ白だった。

世話になった看護師達に見送られつつ、母親と一緒に外へと出てくる埜亜。そして岩代医師に深々と頭を下げると、視線を彷徨わせ慧とぶつかった。そして、慧の元へと歩いてくる。

「白神さん、ありがとうございます」

そう言っ頭を下げた。両手の包帯については何も追求してこなかった。

「別に……お礼を言われるようなことは何もしてないよ」

慧もそれだけ言った。髪の毛のことは訊かなかった。自分も訊かなくなかったし、何より二度ともう会うことのない関係だ。互いのことなど知らないでいた方が後腐れがなくていい。

沈黙は五秒と保たなかった。帳を破ったのは慧だ。

「元気でな」

それだけ言った。

「さようなら」

それだけ返ってきた。

背を向けて去っていく埜亜。最後にもう一度岩代医師に会釈をし

た。車の後部座席に乗り込む。母親が助手席に座って父親が運転席に乗り込む。エンジンがアイドリングを始める音がして、発進する。壁を乗せた車。遠ざかる車の陰。やがて青信号を右折して見えなくなった。

手を伸ばしそうになった。行くなと引き止めそうになった。実際は一部始終を目で追いかけただけだった。手を伸ばす資格も引き止める資格も今の自分にはない。

（終わった……）

そう感じずにはいられなかった。儀式は終わったのだ。最後のユメは醒め、残ったのは現実だけ。これでいい。

再び天を仰いだ。空だけが夢のように青かった。

（さあ、帰ろう）

そう思い、歩き出そうとして視線を戻した先に岩代医師がいた。

彗を見ている。思えば彼への感謝の念は筆舌に尽くし難い。それこそ何千回何万回と頭を下げてでも恩返しは出来ない程に。

彗は近寄っていった。せめて一回分くらいは相殺させてもらった。岩代医師は動かない。くたびれた白衣が風になびいていた。

「お世話になりました」

そう頭を下げた。きつちり九十度。本当に世話になった。三年と、二ヶ月と、三日。万感の思いを籠めて頭を下げ続ける彗。

「……ああ」

返事が返ってくるまでじつくり間があった。彼にしては珍しく歯切れの悪い。何かを迷っているような声だった。

「それでは、失礼します。……お元気で」

「ああ、君こそね」

岩代医師は右手を差し出した。彗は一瞬きよんとしたが、同じく右手を差し出した。ギプスで巻かれて不恰好な握手だったが。

どちらからともなく手を離す。それを合図にしたかのように彗は歩き出した。

そうして、彗は病院の門扉を通り抜け

「白神くん!!」

ようとした直前で、背中に自分を呼ぶ声がかかった。

振り返る。そこに立っていたのは脱力したように息を大きく吐き出した岩代医師だった。さっきまでの、どこか躊躇いのあるそれとは違い、覚悟を決めた強い瞳。

慧はその場で回れ右をして近寄っていった。何事か。

「ああくそ、まったく……。僕は医者失格だな……。こんなことを迷ってしまうなんて……」

それは慧に向けられた言葉というよりも、独白だった。乱雑に頭を掻いている。

「でも、人間失格よりはよっぽどいい、か……。ふっ、そうだな、これを伝えないことの方がよっぽど罪だ」

岩代医師は眼鏡を外し白衣の裾でレンズを磨いた。彼がそんな自嘲的な笑い方をするのを見るのは、これが最初で最後だった。

「先生、なんのことですか……?」

話の流れがさっぱり見えない慧。思わず問いかけてしまった。

「白神くん。大切な話があるんだ。……章田さんのことだね」

アンコールの始まりだ。

\*

NOAH

部屋の整理をする。

どこか新鮮だ。微妙に配置が変わったりしているのは、お母さんが着替えを持って来るために出入りしたからだろう。

私の部屋はこんなに広かっただろうか。

……違うな。

私の視野が狭くなっただけだろう。

こんなにも独りだ……。気が狂いそうになる。

彼はこんな道を往こうとしていたのか。泣き虫な私には絶対に無理だ。今この時でさえ、心が折れてしまいそうなのだ。



机の一番下を開ける。流石にここは変わっていないかった。新品同様のアルバムが一冊あるだけ。

後ろから順番にめくっていく。

無地。

無地。

無地。

最初のページまで辿り着く。そこに一枚だけ写真が入っていた。真ん中に茶色がかったポニーテールの女の子。その右には背が高い金髪碧眼の男の子。そして、左側にはもう一人別の男の子。身長も平均的で、何か目立った特徴があるわけではない普通の男子。

でも私には分かっている。

写真では切れていて見えないけれど、この男の子と女の子は手を繋いでいるのだ。

あの頃の三人。ありふれた日常。色褪せない想いと色褪せたシアワセ。

ぼた、と雫が落ちた。ぼたぼたぼた、と続けて落ちた。止まらない。

「紫紋くん……」

……逢いたいよ……。

「慧い……っ」

逢いたいよ、すごく。

人として。（後書き）

全てが終わった……かと思いきや、です。岩代の言葉の真意、そして明かされる事実とは？そして、埜亜の思わせぶりな口調はどういうことか？そんな感じでお届けしました第十一章！全体の三分の二が終了しましたが、ここから先は更に焦らします！残りなんと十四章！乞うご期待！

## 岩代という男 (前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ ≪≫ で書かれている部分は傍点（強調）

## 岩代という男。

「座りなさい」

\*

医局にて、岩代医師は慧に着席を促す。言われるままに椅子に座る慧。岩代医師は自分のデスクには座らず、窓辺に寄っていき外を眺めた。慧は話が始まるのを黙ってその背中を見つめていた。コチ、コチ、と秒針が規則的に音を刻む。

「……まず初めに言っておくけれど」

そう前置きをして岩代医師は重い口を開いた。

「医者には、『守秘義務』というものがある。患者のカルテや病状に関することを第三者に漏らしてはならない、という法律だ。まあ、医者を目指している君なら知っていて当然だろうけれどね」

「……………」

知ってはいるが、それが埒亜とどう繋がるのかは慧には予想がつかなかった。ただ静かに次の言葉を待つ。

「僕は、これからそれを犯す」

「な　!?!」

慧の目が驚愕に見開かれる。岩代医師は自ら罪を犯そうと言うのだ。一体何が彼をそこまで駆り立てるのか。

振り返る岩代医師。

「実はね、章田さんはもう記憶を取り戻しているんだ」

「え……………」

何を…………彼は今なんと言った？

ノアハモウキオクヲトリモドシテイル　？

「三日前、君が面会に来た日のことだ。あの後章田さんには少し眠ってもらったんだがね、次に目覚めた時、彼女は全てを思い出していた」

待て。ちょっと待て。

思考にタイムラグが生じる。聴覚が受信した言葉を理解に移すまでに三秒間の遅れが発生する。矢継ぎ早という程のスピードではないが、慧を混乱の極致に至らしめるには十分だった。

「こういうことは別段、珍しいことでもない。『記憶障害』というものは、記憶を？なくした？わけではなく、言わば、引き出しから物を？取り出せなくなった？状態みたいなものだからね。今回みたいにスイッチが切り替わるように突然記憶を取り戻すといった事例は過去にいくらかもある」

理屈では分かる。理屈では分かるが……。

「……ということは、さつき会った埜亜は……」

「ああ。もう君のことも思い出していた」

「だったらどうして!!」

どうして、何も覚えていないような口ぶりだったのか？

がたりと勢いよく椅子から立ち上がる慧。

「落ち着きたまえ。言っただろう、《全て思い出している》、と」

慧ははっとした。頬を冷たい汗が流れるのを感じた。

「まさ、か……」

「そう。《君が本当は記憶を失ってなどいなかったということも知ってしまった》」

「記憶を取り戻した彼女はひどく錯乱していてね。うわ言のようにしきりに君の名前を呼んでいたよ。僕らがいくら叫んでも聴こえてないくらいに」

慧は、もう何も言えなかった。最良を目指した全てが最悪の方向に向かっていているように感じてならなかった。

（俺が、追い詰めた）

ごめんなさい、と彼女は言った。

（俺が、傷つけたんだ）

泣き腫らした顔を隠そうともせず、ごめんなさいと。

「翌日の朝、彼女を見た僕は驚いた。髪が一晚で真っ白になってい

たのだからね」

それがどれ程のショックだったのか、誰が計り知ることが出来よう。

「君の決意を汲んで、彼女も記憶を失ったフリをし続けることを選択した。『彗が私と別の道を行くと決めたならそれに従う』、と言っていた。僕も彼女から、君にこのことは教えないようにと固く口止めされていたんだけどね」

埜亜は彗に嫌われたと思ったのだろうか。嫌われたから、記憶喪失を装って自分を遠ざけたのだと。どんなに失意に沈んでいたとはいえ、他の男　しかも彗の親友と寝た女などと共に生きていけるものか、と思っただろうか。

そんなことはない、と彗は思った。埜亜は賢い。そして誰より白神彗という人間のことをよく知っている。彗は、自身の短所を探す天才だ。そんな彗が、誰かを嫌いになるなど出来るはずがないのだから。

「……付け加えるなら、もう一つ。章田さんは記憶を取り戻した代償に、厄介なことに今度は別の障害を抱えてしまっただね」

「別の……障害？」

「こくりと頷く岩代医師。

「言語障害だ」

言語障害。

「そんな……、だって、さっきの埜亜は普通に……」

「発作的なものでね。普通の時はいつも通りに会話が出来るのだけれど、感情が昂ぶったり極度に緊張したりすると発作的に一切発声が出来なくなる。心因性の吃音症と呼ばれる分類に入る」

さようなら。

そう言った埜亜のことを思い出す。たった二言しか口にしなかった。彼女らしからぬ、淡泊な会話。あれは、彗の前で発作を起こすことを恐れたからでは？

「流石に……呆れる程に似た者同士だね。一緒にいたらこの障害が

君の足を引つ張ると思つたんだろつ、『慧には医者になるといふ輝かしい未来がある。そこにこんな私がいたら邪魔にしかならない』  
と言つていたよ」

なんとという皮肉だ。愛し合った男と女が、お互いのことを想い合つて全く同じことを口にしたのだ。

「……話は以上だよ」

話を終えた岩代医師は「さて……」と言つて慧の元へと歩み寄る。

「どつする？」

「どつ、つて……」

「聞くところによると、章田さんが療養のため引つ越すのは明日らしい。僕の見立てだと三年……いや、恐らくもう二度と帰つてこない」

「……」

「何かやり残したことはないのか？」

岩代医師は初めて見せる、険しい目をして問いかける。

「何かやり過ぎたことはないのか？」

問いかけは続く。

「痛みを抱えたまま、この先生生きていくのか？」

岩代医師の叱咤は続く。

「痛みを与えたまま……この先生生きていくのか？」

それでも 慧は迷つていた。

「……いいかい、白神くん」

ふつと、表情を和らげた岩代医師は優しく慧の肩に手を置いた。

温かい手。いつだったか、そんな温もりを誰かと分かち合った気がする。

「奇跡を起こすのは、神様なんかじゃない」

気紛れでくそつたれな万能の神様なんかじゃない。

「奇跡を起こすのは、いつだって人の想いだよ」

彗を見送った岩代医師は窓の外を眺めていた。

あれで良かっただろうか？

自分は間違っていないかっただろうか？

これまで『中庸』を頑なに維持し続けてきた彼にとって、今回のようなケースは極めて異例である。更には故意的な守秘義務の違反。もしこのことが誰かの耳に入れば、間違いなく首が飛ぶ。

だが、それでも不思議と心は穏やかだった。

岩代医師は、白衣のポケットから未開封の煙草と古いジッポライターを取り出した。

封を開け一本目を取り出し、口に銜える。ちっ、ちっ、ちっ……と何度か点火に失敗するが、ようやくついた火で煙草を焼く。

長年味わっていないかった煙草の味。大きく吸って大きく吐き出した。燻らせた紫煙が哀愁を誘う。二十五になると同時にやめた煙草だったが、時折こうして自分への慰みに使っている。

だが、これ程までに旨い一服がかつてあっただろうか。

「……滑稽な話だな……」

みんながみんなのシアワセを願って、みんなで不幸になった。でも。

「泣いた後に笑えるとしたら、その涙の意味は、きつと素敵だ」

この翌年、彼は心筋梗塞で還らぬ人となる。

そんな岩代の胸の内には、生涯誰一人として触れることを許さなかった秘密の宝石箱があった。

岩代は婿入りだった。幼い頃に、両親と兄のいた実家から勘当同然で家を出て、岩代家に婿として入った後に医者として大成することになる。

旧姓は、『白神』という。



岩代という男。(後書き)

今回、伏せられていた色々な謎が明らかになります。そして岩代医師……かっこいい！ここで彼の出番はおしまいです。が、慧達の心にいつまでも忘れられない記憶として残っていくでしょう。そう言いつつも物語は終盤。まだまだ出し惜しみますよー。あと十三章！

次章はついに慧と紫紋が再会、長いです！

## あの日の海で。(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・《 》で書かれている部分は傍点（強調）

## あの日の海で。

\*

S U I

俺は電車に揺られていた。

二両編成の小さな車内には、俺以外に、うつらうつらと舟を漕ぐ朝帰りと思しきサラリーマンの姿しかない。

時刻は午前五時十四分。冬の朝焼けにはまだ遠く、ゆっくりと流れていく窓の外では、ちらちらと見える街灯が未だに勢力を遺憾なく発揮していた。

既に俺が乗車してから三つの駅を通過している。更に一駅。二駅。三駅目、この電車の終点だ。俺は反動をつけて座席から立ち上がる。改札を通り抜け、人がまばらな道を歩いて五分、目的地に到着した。

海が見えた。ロマンチックと呼ぶには程遠い、暗くて濁った不気味な海ではあったが。そんな海、ましてやこの季節この時間に人がいるわけもなく、そもそもこの海は遊泳用ですらない。

ここは海浜公園だ。海に面したこの土地がせめてもの観光所と称して半ば強行に作ったと聞く。確かに来訪者は増えたが、心無いインモラルな少数の人間によるゴミの不法投棄などでかえって海が汚れ、今ではほとんど惰性で残っているだけの名ばかりの海浜公園である。

三年前の十月か十一月。その辺りの記憶は定かではないが、俺と埜亜、紫紋の三人でここに軽いピクニックに来たことがあった。埜亜が張り切って手作りの弁当を持ってきたはいいが、それは分量を間違えたのか明らかに五人分はある巨大な弁当箱で、俺と紫紋が必死に食いまくったことははっきり覚えている。

そしてその後、三人で写真を撮った。カメラは俺が持ってきた。海をバックに真ん中に埜亜、右側に紫紋、左側に俺が立ち、通行人

に撮影してもらった。俺がいきなり埜亜の手を握ると、埜亜もすぐにそれを握り返してきた。幸か不幸かその部分はちょうど写っていないかったが。その写真は焼き増ししてみんなに配る予定だったのだが……。

『なんか一人一枚持つてるとありがたみがなくなえ？ 現像は一枚だけでもいいよ』

という紫紋の言葉に賛成し、代表として埜亜が保管することになった。埜亜はその帰りに新しいアルバムを購入し、後日現像した写真を一ページ目に大事に大事にしまった。

そのアルバムは、俺達三人を撮ったシアワセな写真で埋まっていたはずだった。しかし俺が事故に遭ってしまったせいで、奇しくもそれが最初で最後の一枚になってしまった。

俺は……まだ迷っていた。

埜亜は今日引越す。恐らく、今日を逃せばもう二度と会えない。二人の道は未来永劫交わることなく離れていくのだ。

俺に、それを引き止める資格はあるのだろうか。埜亜の決意を無駄にするだけの資格がこんな俺に。

波打ち際に立つ。傍から見れば海を前に黄昏ているようで詩や絵にでもなるのかもしれないが、現実はまだ一人の馬鹿な男が葛藤しているだけである。

埜亜……逢いたいんだ……逢いたいんだよ……。

本当に……逢いたいんだ。逢って……抱き締めたいんだ……。

でも 今の俺に、そんな強さは……ない。

知らず視界がぼやけていた。ぶんぶん頭を振る。そんな弱さは捨てたはずだ。

それでも……、俺はまだ埜亜を抱き締めるほど強くもない。本当に……、情けない、未熟者だ。

ざっ。背後で砂を踏み締めるような音。足音？ いや、空耳か？ とうとう俺も末期かもしれない。

ざっ。しかし、また聞こえた。今度ははっきりと。空耳ではない。

こんな時間にこんな場所に来る変わり者が俺以外にもいたのか……  
そう思うとかなり愉快だった。

俺は振り返らない。放っておけばとっとと退散するだろう。

ざっ、ざっ。その足音はしかし、あるうことかこちらに近付いて  
きている。

ざっ。そして、すぐ背後でそれは止まった。

「……よう」

聞き覚えのある声。間違いない、やつ声だ。

「紫紋……」

闇の中に於いてさえ輝く金色こんじきの髪。エメラルドのような翠緑の双  
眸はまるで野生の山猫のよう。

「久しぶりだな」

紫紋が口を開く。確かに久しぶりだ。三年ぶりか。これまでも  
それくらい会っていない期間はあったが、今回こそはその言葉の深  
みが違いすぎる。

「なあ慧。お前、こんなとこで何やってんの？」

口調こそ懐かしいが、声も顔も目つきも、俺が知っているどの紫  
紋でもなかった。重く響く。さざ波の音に混じって響く。

俺は応えない。

「埜亜のところには、行かないのか？」

「……ふっ」

《埜亜》、か……。

「はは、はははははははは……！」

俺は耐え切れなくなって笑ってしまった。実際に改めて俯瞰して  
見てみると笑えてしようがなかった。

「あん？」

訝しげに声を上げる紫紋。

「いつの間にか呼び捨てか……伊達に付き合っていないんだな、お前  
達」

「……」

「なら訊くが、お前こそなんで埜亜の見舞いに行かなかつたんだよ。お前にとって、埜亜はその程度の存在だったのか？ ……ああ、あれか？ 結局身体だけが目当てだったってわけか？」

「なんだ？ 何故俺はこんなことを紫紋に言っている？ 紫紋の顔を見てとうとう気がふれたか。もう自分が何を考えているのか訳が分からなくなってきた。」

「……お前には分からねえよ」

「分かるさ。親友が死にかけているって時に、人の女を寝取ったっていうことだろ。傷心の女ほど口説きやすいのはいないって言うもんな。いやいや、大した策士だよ。佐々賀紫紋クン？」

止まらない。紫紋の顔を見て感情がごちゃ混ぜになって、口が勝手に動いて止まってくれない。違う。俺はこんなことが言いたいんじゃない。嫌だった。どうして親友にこんな罵詈雑言を浴びせかけなければならぬのか。積もりに積もった穢れた澱がアナーキ―化した口から止め処なく発せられる。親友をクズの領域に貶めようとしている自分がどうしようもなく嫌だった。

「慧……」

紫紋の顔がみるみるうちに憤怒で歪んでいく。

「思った通りだ。やっぱりやる時はやる男だよ、お前は　　」  
ばきいっ！

左の頬に鈍い痛み。次の瞬間には俺は海に顔面から突っ込んでいた。殴られたのだと気付くより早く、自分で立ち上がるより早く、胸倉を掴まれて強引に引っ張り上げられる。

「……言いたいことはそれだけかよ、ああ！？」

仁王のような形相の紫紋が俺を射抜くように睨み付けていた。続け様に、今度は右を殴られる。再び吹っ飛ぶ俺。口に塩辛い海水と砂の味が広がる。

「デメエ……！！」

二発も殴られて俺も頭に血が昇っていった。立ち上がって紫紋に向けて力任せに腕を振るう。だが既に両頬に食らっているため目の

焦点が合わない。紫紋はさつと横に飛び退いただけで躲してみせた。俺は勢い余って砂浜に転がる。その上に紫紋が跨りマウントポジションを取られる。

「馬鹿だ馬鹿だとは思ってたけどな……まさかここまでヘタレ野郎だとは思ってなかったよ。それとも、轢かれた時に頭打っておかしくなったか？」

「……んだと？」

「埜亜のため埜亜のためとか言っときながら、結局は自分が傷付かないように逃げてるだけじゃねえか！」

その言葉に俺はキレた。紫紋が腕を振り上げる。俺の顔面目掛けて振り下ろすと同時に、死角になる逆サイドから横薙ぎのブローを思いつ切りお見舞いしてやる。

顔と腕に衝撃。骨が折れているため、腕にも絹を裂くような激しい痛みが奔る。だが知ったことか。ギプスで硬く固定されている分相手に与えるダメージもでかい。痛み分けた。巨体が揺らぐ。その隙に俺は横に転がってマウントポジションを抜け出した。すぐさま立ち上がり、回転を加えた渾身の蹴りをかます。踵に手応え。紫紋が砂塵を舞い上がらせつつ転がる。

お返しとばかりに、今度は俺が上になってやった。拳を振り下ろす。

「俺だつてなあ……！」

一発。

「本当は……！」

二発。

「離れたくなんて……なかつたんだよおお……！」

三発。

ギプスの巻かれた腕で原始的に殴り続ける。その都度響いてくる衝撃に意識が遠くなりそうになる。

四発目。これを紫紋は腕を盾にして防いだ。

「だつたらなあ……！！！」

下から俺の胸倉を掴んで引き寄せる紫紋。

「一緒にいてやれば良かっただろうが!!!」

そして自分も上体を起こして、頭突きを食らわしてくる。眉間に激しい衝撃。目の前で爆弾が破裂したかのように視界がチカチカと明滅する。

そこからはとにかく死に物狂いだった。

殴る。

殴られる。

蹴る。

蹴られる。

上になる。

下にされる。

攻めも守りもあつてないようなものだ。俺という竜と紫紋という虎が、野性的に死力を尽くして鎬を削り合う。

「男つてのはなあ!!!」

紫紋が叫ぶ。

「どんなに辛くても!!!」

叫ぶ。

「惚れた女を泣かせちゃあ、いけねえんだよ!!!」

そして全身でぶつかってくる。

「泥をすすって!!!」

叫ぶ。

「血反吐を吐いて!!!」

叫ぶ。

「それでも護り続けると! どうして誓えなかった!!!」

「つるせえええええ!!!」

カウンターで顎を狙い打つ。ふらつく紫紋の身体。俺だって膝がガクガクだ。腕はもう使い物にならない。全体重を乗せたシヨルダ―タツクルで鳩尾を抉り込むように突き上げる。

「埜亜にはお前がいただろうが!!!」



俺が叫ぶ。

「お前になら任せられると思ったんだよ!!」  
叫ぶ。

「誰でも良かったんじゃない!!」  
叫んで。

「そこにいるのがお前だったから！ お前なら埜亜を幸せにしてやれると思っていたんだよ!!!!」

「この……馬鹿野郎!!!!」  
脇腹に膝。思わず呻く。よろめいたところを両手で諸共に押し倒された。

もう抵抗する力は残っていない。大の字に手足を広げて、酸素を欲する金魚のように喘ぐ。

紫紋も同じようだった。体重をかけてくるのは俺を押さえつけるためというより自分を支えるためだった。

「お前……今まで一体埜亜の何を見てきたんだよ……!!」  
荒れた息を整えようとせせりに紫紋が口を開く。

「埜亜はな……俺と一緒にいる間、一度たりとも笑ったことなんてなかった!!」

胸がズキリと痛む。

胸のうちを吐露する紫紋。

「埜亜はな……泣いていたんだぞ……」  
ズキズキと痛む。

ぎり、と歯齧みをして。

「俺に抱かれた後、いつつも泣いてたんだ!!!!」

刃がザクリと抉る。

腕を振り上げて。

「ごめん、ごめん、って……!!」

ザクザクと抉る。

振り下ろした。

力なく。

「ずっと……っ、泣いていたんだぞ……」

胸に穿たれた孔。どうしようもなく痛い。ぼす、と俺の上に紫紋の手が落ちる。そして重みがふっと軽くなった。俺と同じように砂の上に横たわる。

二人とも血と汗と水と砂にまみれていた。

「はーっ、はーっ、はーっ……」

「ぜーっ、ぜーっ、ぜーっ……」

俺と紫紋の荒い呼吸と、寄せては返す波の音。しばらく、ただそれを聴いていた。

「なあ、慧……」

「……なんだよ」

「なんで……こんなにうまくいかないんだろうな……」

「さあな……知るかよ……」

そう言って、俺は自分の失言に「いや……」とかぶりを振った。

「きつと……神様が気紛れで、くそつたれで、万能だからだろ……」

「そっかあ……。ああ、そうかもしれないな……」

そう言って紫紋はがばつと半身を起こした。

「なら、少しは感謝しないとな」

「え？」

「なあ慧。アメジストの宝石言葉って知ってるか？」

アメジスト。それは二月の誕生石であり、あの日に埜亜にプレゼントしようとしたものだった。

「知ってるわけないだろ、そんなの……」

紫紋はこちらを向いて言った。

「『心の平和』、だよ」

俺は息を呑んだ。

……まったく、なんの皮肉か。

「……なんて顔してんだよ、慧のくせに」

そう言って、紫紋は俺の頭を軽く小突いた。

「道化は道化らしく、最後まで笑ってなきや、嘘だろ？」

「……………」  
俺は思わずため息を吐いた。

ああ、くそ、まったく、言う通りだ。

ようやく思い出した。

道化は、いつだって観客を笑わせていなければならなかったのだ。

「行けよ」

「分かってる」

俺は立ち上がる。全身が悲鳴を上げていた。構うものか。そんなことに屈しない強さをもらったのだから。

紫紋はまた倒れ込んだ。

「あーあー!!」

その声を背に俺は歩き出した。

「……………俺、お前が嫌いだ」

紫紋が言った。

「……………」  
「だから……………幸せになれよ。でないと……………一生赦さないからな」

「……………ああ」

まったくこいつは……………。

どこまで、嘘をつくのが下手なのか。

「奇遇だな。俺も、だいつきらいだよ」

埜亜。

待ってる。

あの日の海で。(後書き)

男と男の熱い殴り合いです。こういうのが大好物の月織としては、やっぱり燃えは外せないかな、と。で、白状するとこの会話の中でラストに続く伏線が隠れています。どれだか分かるかな？ というわけで最大のボリュームでお送りしました第十三章！ これから先はますます焦らしていきますよー！ あと十二章！

## 紫紋。(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ ≪≫ で書かれている部分は傍点（強調）

紫紋。

\*

SHIMON

あー……いつてえなあ……。

慧の奴、思いつ切り殴ってくれやがって……。まったく、目が腫れて開いてくれないじゃないか。

傷物にしてくれた責任をどこかで取ってもらいたいもんなんだけど……。

もう無理だもんな。ほんと、割に合わないことしちゃったよ。

潮の香りを孕んだ海風が心地良い。日照った身体に砂の地面が心地良い。冬の朝特有の透明な空気が俺を包み込んでくる。

ふと、光が射した。

朝か……。

いや、まだそんなに太陽は昇っていない。

ああ、そうか。

もう、時間なんだな……。

せつかく人がいい気分を満喫していたっていうのに。間の悪いところの上ない。

でも、出来ることは全部やった。

もう いいよな？

俺は……やり遂げたよな？

なあ神様よ。

やっぱりアンタは思った通りにくそったれで。

でも、思ったよりは。

「C'est très bon」

俺は目を閉じた。

## 紫紋。(後書き)

焦らし効果が全くないと言えば嘘になりますが、どうしてもこの部分だけはピンポイントで抜粋したかったというのが正直な気持ちです。紫紋の思わせぶりな心情は果たして、どういう意味を持っているのか？ 詳細はエンディング間近で明らかになります。お楽しみに！ まだまだ焦らししていきますよー！ あと十一章！

## 彗。(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・《 》で書かれている部分は傍点（強調）



\*

S U I

「……繰り返してお伝え致します。五時五十四分頃 駅で発生した人身事故の影響で、只今全線で運転を見合わせております。現在、復旧の目処は立っておりません。ご利用のお客様には大変ご迷惑をおかけ致しますが……」

「ざけんなっ……！」

駅構内に流れるアナウンスに毒づく。何が人身事故か。俺は駅を飛び出した。

どうする？

タクシーを使うか。ズボンに入れた財布を取り出す。野口が一枚と小銭が数枚しか入っていなかった。あの事故に遭った日にプレゼントを買ってそれっきり。そもそもこんなスタボロの怪しい格好では乗車拒否を食らう可能性の方が高い。

打つ手なしか？

「……馬鹿か、俺は」

ぶんぶんと頭を振った。何故一番単純な思考に至らない。人は何のために二本の足を持っているのだ。電車で六駅、お謎え向きなことに線路は一直線で、それに沿って行けば最寄り駅に着くから迷うことはない。やってやれないことはない。

問題は、時間。埜亜が発するのが何時かは分からないが、少なくともそう遅い時間ではないはずだ。タイムリミットが迫っている。

面白い。

不謹慎ながら、俺は血が騒ぐのを感じていた。お姫様を迎えに行くのが、そう容易くあつてはならない。

それでいいんだろう？

空の上で、誰かが頷いた。

駆け出す

。

慧。(後書き)

はいはい焦らしモードもここに極まれり、って感じですねー。ですが、迷いを捨てた慧はきつと誰よりも強い男だと思っています！  
クライマックスまで一直線、あと十章！！

## 罫罫。(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の( ) で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ ≪≫ で書かれている部分は傍点(強調)

桝田。

\*

NOAH

目が覚める。枕元の時計はまだ鳴っていない。

今日でこのベッドともお別れだ。ずっと使っていた布団。お気に入りのテンピュール。名残惜しくないと言えば嘘になるが、持って行く気にはとてもなれない。

だって、思い出が多すぎるから。思い出は……優しすぎるから。服を着替える。パジャマを脱ぐと途端に朝の冷気が直接肌を刺し、私は思わず身体を震わせた。

鏡を見る。白くて短い髪の毛の見慣れない少女が映っていた。

手早く着替えを済ませ、リビングへ。お父さんとお母さんが忙しくなく動き回っていた。

テレビをつける。ちょうど七時のニュースが始まるころだった。  
あと、一時間。

## 桢亜。(後書き)

記憶を取り戻していることが判明してからののはじめての桢亜視点ですが……短っ！ これから先何回か視点移動するので、ここで区切らざるを得なかったのですが……まあ、お付き合い下さい。

## 駆ける。(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・《 》で書かれている部分は傍点（強調）

駆ける。

\*

S U I

携帯を開いて時間を確認する。デジタル時計の数字が六から七に変わったところだった。

ようやく終点の次の駅まで来ることが出来た。  
たったの一駅。

これがあと五回も続くのだ。

身体は早くも限界を訴え始めている。まだ退院して間もないし、何より紫紋との乱闘が予想を遙かに上回る疲労を与えていた。

くそ……紫紋め……。今度会ったら怨み言の一つや二つ、覚悟してもらわないと割に合わん。

「何を、弱音を……」

限界なんて自分が決めるものじゃない。仮に本当に限界なのだとしたら、そんなもの超えてやる。そのくらいの覚悟がなくて埜亜をこれから先護り続けられるものか。

そう考えると、アドレナリンが急激に異常分泌されるのを感じた。痛覚が遠ざかっていく。ギアが一つ飛ばしで上昇する。自己を変革させる。ホルモンなど自分で操作できるのだと信じ込め。嘘や迷信さえ気合と執念で真実に変えてやればいい。

俺は加速する。振り切るスピードメーター。



駆ける。(後書き)

まだまだ焦らす第十七章です。案としてもう一章分付け加えようとも思いましたが、そうすると前言撤回になるのでやりません。有言実行です、焦らし効果全開でお送り致します！果たして彗は間に合うのか！？ 波乱の残り八章！！

## 溢れる涙。(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・《 》で書かれている部分は傍点（強調）

## 溢れる涙。

\*

NOAH

ニユースが毎日やっているような内容で流れ続ける。今日の中心の話題は動物園で新しく生まれた白熊の赤ちゃんらしく、テレビ局から現場にいるアナウンサーにバトンタッチする。ズームアップして、愛らしい仔熊が画面いっぱいに映し出された。

《あの事故》は日本ではもうやっていないのか。確かに無関係の人達からすれば、そう長続きする話題でもないのかもしれない。

つまらないことこの上ない。手持ち無沙汰だ。でも私が手伝おうとすると親が異様に心配するので何もすることがない。部屋に戻る。最後だ。立つ鳥跡を濁さずというように、もうちよっと部屋を掃除しよう。そんな時、どうしても目が行ってしまふのはやはり引き出しの一番下。

アルバムを開く。これは持って行けない。これは私の弱さそのものだ。誰かが 慧が隣にいないければ生きていけなかった私の弱さの象徴だ。こんなものがあっては、私はますます弱くなる。もつと強くならないといけないのだ、私は。これからは誰も助けてくれないのだから。あの日は慧が手を差し伸べてくれた。今は、いない。

まずい、また目が滲んできた。駄目だ。こんなことで泣いてはいけない。そんな覚悟でこの先生きていけると思っているのか。そんな甘えはもう赦されないのだ。

なのに……。

「慧……逢いたいよ……」

目尻から落ちる雫は止めようがなくて。

溢れる涙。(後書き)

いつの間にか四月に入ってから毎日更新しております。それはさておき、本文中でさりげなく傍点がついているとある単語。果たしてどんなことがあったのか？ どういう意味があるのでしょうか？ そんなことを期待させつつあと残すところ七章！ 急げ替！

## 不撓不屈（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ ≪≫ で書かれている部分は傍点（強調）

## 不撓不屈。

\*

S U I

……あと、一駅。たったの一つ超えるだけなのだ。

「なのに……っ」

俺はとうとう膝をついてしまった。太ももから下の感覚が痛み以外ない。まるで自分のものだとは思えない。

足が動かない。なら腕で進め。それも無理なら、そんな邪魔な四肢は引き千切って身体で這いずり回れ。これしきのが出来なくて何が男か！

俺はあまりに罪深い。埜亜を傷付け、紫紋を傷付け、それで自分一人のうのと生きているなんてことが赦されるはずがない。天国になんて行けなくていい。ただ地獄に落ちる最期のその時まで罪を償い続ける。俺にとっての贖罪とは、誰かを笑わせ続けること。誰かをシアワセにすることが俺のシアワセだ。偽善？ 結構じゃないか。俺はそれでいい。その隣に愛した女がいるなら尚いい。手を伸ばした先に愛した女がいるのなら俺はいくらでも頑張れる。

さあ進め。誰かの手など借りん。気紛れな神よ、止められるのなら止めてみる。邪魔をするならぶん殴ってやる。ここにいるのはただの人間ではない。泥をすすって血反吐を吐いて、それでも章田埜亜を護り続けると誓った白神慧だ！ 俺の心は決して折れちゃいない！！

不撓不屈。(後書き)

いよいよクライマックス。もうすぐ焦らしシリーズもおしまいで、物語もおしまいです。敢えて多くは語りません、あと六章！

全てのシアワセはここに置いて。(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・《 》で書かれている部分は傍点(強調)



## 全てのシアワセはここに置いて。

\*

NOAH

そろそろ時間だ。

私はアルバムをそっと閉じる。全てのシアワセはここに置いて、私は行かなければならない。それは気が遠くなるような過酷の始まりだ。

願わくは、いつか彗が同じ時間に同じ空を見上げていますように。もしそれが叶うなら、遠く離れていても彗とどこかで繋がっている気がした。せめて、それくらいは赦してもらおう。

必要最小限の物だけを詰めたバッグを持ってリビングに移動する。ようやく落ち着いたので、両親はお茶を飲んでいた。二人には本当にすまないことをしたと思っている。せつかく苦労して手に入れたマイホームを出て行くことになったのは私のせいなのだから。最後にくらいゆっくりさせてあげたかった。

そして、時計の長針が頂点を指す。

「行こうか」

お父さんが席を立った。車を駐車場から出し家の前まで着け、そこから高速道路を乗り継いで田舎へ向かう。私は乗っているだけなので気楽でいい。もっとも、あれ以来車はどうしても好きになれないが。

私とお母さんで、窓の鍵やガスの元栓など、戸締りの最終確認を行う。そして最後に玄関をしっかりと施錠して、生まれ育った家を後にした。

お父さんを待っていた。あと数分もすれば、あの曲がり角を曲がるのが見えるはずだ。私はそれを待った。

そして、車が来た。トランクに荷物を詰め込んで、私は後部座席に乗り込んだ。シートベルトをしっかりと締め、静かに発進する。

窓の外を景色が流れていく。見慣れた我が家が遠ざかっていく。

さようなら、私の家。

さようなら、想い出。

(さようなら、大好きな人 )

また、涙腺が緩む。本当に私は駄目な子だ。

車が曲がり角に差し掛かる。

急ブレーキがかかった。

何事か。フロントガラス越しに前を見る。

人が立っていた。

ずっと逢いたかった、私の大好きな人が。

全てのシアフセはここに置いて。(後書き)

祝！ 十日間連続更新！ と言ってもまあ、基本的に出来上がっているものをコピペするだけなので楽なものです。いよいよ物語も佳境！ 果たして替は間に合ったのか！？ 残り五章、詳細はまだ伏せますが、まだこのまま一直線では終わらないということだけは言っておきましょう。どうぞお付き合い下さい。

せめて、今だけは。（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ ≪≫で書かれている部分は傍点（強調）

せめて、今だけは。

\*

S U I

途中から、記憶がひどく曖昧だった。

どこをどう走ってどこをどう曲がってきたのか全く覚えていない。ただ、埜亜と永遠に会えないかもしれないという恐怖に全身が戦慄いて意識に霧がかかった。一番奥底に仕舞ってあったとっておきの魂に火がついた。気が付けば俺は曲がり角を左折しようとしていた埜亜を乗せた車の前に躍り出ている。運が悪ければ轢かれていたかもしれない。だがそんな刹那的な感情よりも埜亜を失う恐怖が斜め上を行つた。俺の前、一メートル程の距離を空けて車が静止した。

「君は……！」

運転席から男性が出てくる。埜亜の父親だ。そして、助手席からは埜亜の母親。そして。

「慧……？」

後部座席から降りてきたのは、章田埜亜その人。信じられない、といった表情で俺を見ている。

「慧！」

駆け寄ってくる埜亜。笑っているのか泣いているのかよく分からない表情。本人もよく分かっていないのかもしれない。

「慧……」

困惑したように、しきりに俺の名前を呼ぶ。何か言葉をかけたいが出てこない、そんな様子だった。

それきり、口を噤んでしまう。

「埜亜」

その後ろから、埜亜の父親がそつと声をかけた。

「父さん達は、ちよつと忘れ物をしたみたいだから少し戻るよ。ここで待っていなさい」

そう言つて車を路肩に駐車させると、母親を連れて、来た道を歩いて戻つていった。その刹那、俺と目が合つたとただ首を縦に振つた。去つていく二人。残された二人。

「慧……あのね……、あの……あの……」

戸惑うばかりの埜亜。それに反して、俺の心は驚く程冷静だった。

「……間に合つた、かな？」

「えっ……？」

「まだ……間に合う、かな？」

俺は笑いかけた。自然に笑えた。あれだけ煩わしかった全身の疲労も、今ではそれさえ清々しい。

「なあ、埜亜」

「……うん」

「今の俺には、お前を抱き締めることは出来ない」

その言葉に、びくつと身体を震わせる埜亜。不安に揺れる瞳。相変わらず綺麗だ。吸い込まれそうになる黒い瞳。白くなってしまった髪の毛の色がそれを更に際立たせ、神々しく彩る。

「でも、隣にいることは出来る。  
強くなる。

これからは、ずっと埜亜の側にいる。

ずっと埜亜を笑わせ続ける。

ずっと埜亜を護り続ける。

シアワセにする。

だから……駄目か？

お前の側にいたら……駄目か？」

埜亜は一瞬ぼかんと口を開け。

潤んだ瞳でぶんぶんぶんと激しく首を振る。

「今の俺は強くない。  
でも強くなる。

埜亜を護れるように強くなる。

おっさんになつても。

よぼよぼのじいさんになっても。

いつまでだってお前だけを護り続ける。

この身が朽ち果てて魂だけになっても、永遠に護り続けてみせる。  
だから」

だから、お願いします

強くなるから

今だけは

せめて、今だけは

どうか

君を、抱き締める強さを下さい

俺は正面から埜亜を抱き締めた。

「あ……………」

温かい。人の身体とはこんなにも温かいものだったのか。思い出した。こんな温もりを、俺は知っていたんだ。

「好きだよ、埜亜」

「っ……………」

「……………愛してる」

「つく……………っ……………」

「埜亜。愛してる」

埜亜はもう何も言わない。発作が起きたのだ。しゃくり上げるような声にならぬ声を上げて、ただ涙を滂沱と流す。構わない。その涙は美しい。それが何にも変え難い埜亜の気持ちの具現に他ならぬのだから。

埜亜の身体。埜亜の匂い。埜亜の温もり。全てこの腕の中にある。もう手放したりしない。もう二度と失いはしない。

(あれ……………おかしいな……………)

なんで……俺まで泣いてるんだ……？

まあいいや……。この涙は無価値じゃない。これはきっと、別れの涙。そして、架け橋の涙。

弱い自分と別れて、過去これまでと現在いまと未来これからを繋ぐ魔法の涙だ。

俺は、静かに埜亜にキスをした。三年ぶりに味わう埜亜の唇は、ファーストキスと同じ涙の味がした。

そうして俺は。

気を失った。



せめて、今だけは。(後書き)

焦らしシリーズもようやく終了、残すところあと五章になりました。無事に埜亜のところへ辿り着いた慧。この二人にはもう何も心配いらないでしょう。そして埜亜のお父さん、何気にグツジョブ！ そんなわけであと四章！ このままハッピーエンドでは終わらないぞ！？

## 契り。(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ ≪≫ で書かれている部分は傍点（強調）

契り。

\*

次に慧が目覚めたのは、夕暮れも過ぎようという時間帯だった。見慣れない天井が視界に映る。

「……………起きた？」

耳元で声。顔をそちらに向けると最愛の人の笑顔がそこにあった。

「埜亜……………」

「うん」

「ここは……………？ 俺は……………？」

慧は自分の置かれていた状況がいまひとつ掴めなかった。まさか、埜亜を抱き締めたあれも自分の脳が都合の良いように書き換えた幻だったのではないか。そんな疑念も一瞬よぎったが、あの温もりを間違えようはずもない。そして今、隣に埜亜がいるという事実がなによりの証明である。

「ここは私の部屋。で、私のベッド。慧の寝顔、可愛かった」

そう言ってクスクスと笑う埜亜。

慧は思わず顔面に血液が集中するのを感じていた。恥ずかしさと嬉しさで半々だ。

つまり、あの後慧は限界を超えた極度の疲労で気絶してしまったのだ。いくら揺すっても起きる気配がなく、埜亜の父親にここまで背負ってきてもらったらしい。それが朝の八時前後だったことから逆算すると、半日近く眠っていたことになる。

「……………両親は……………？」

「一度実家に戻るって。今回の引っ越しが水に流れちゃったから直接会ってお詫びしてくるって。で、せっかくだから一泊してくるって。馬鹿みたい。気を使ってるのバレバレなんだから」

「そっか……………。帰るの、やめたんだな」

「当たり前じゃない。一番好きな人と離れられるわけじゃないでしょ」

愚問、とばかりに放言する埜亜。

「……ねえ、慧」

「なに、埜亜」

「信じて……いいんだよね？」

顔は笑っていた。でもそれはどこか不安げな笑顔だった。当然だ。

埜亜は弱い。必死で微笑みを保つのが精一杯のか弱い少女なのだ。

「私……ダメだよ……。独りぼっちなんかじゃ生きていけない。慧がいないと生きていけない。慧とずっと一緒にいたい。慧とずっと一緒にやらないとやだ。……こんな弱くてダメな子だよ」

それでも。

「それでも……ずっと側にいてくれるって、約束してくれるんだよね？ 支えてくれるって、誓ってくれるんだよね？ 慧のこと……信じていいんだよね？」

約束する。

はい、誓います。

信じてくれ。

どれも陳腐に思えてならなかった。だから慧は。

「……側にいる」

そんな強がりみたいな一言しか言えなかった。

でもそれは 埜亜がずっと欲しがっていた言葉で。

「……はい」

潤んだ瞳ではにかみながら、はつきりと頷いた。

二人には、それだけで十分だった。何よりも硬い契りの儀式。二人で勝ち取った運命の始まりだった。

「……ん」

埜亜は背を伸ばして、慧の頬にちゅん、とキスをした。雛鳥のつばみみたいでくすぐりたい。

「……埜亜」

「ん……なに？」

惚けたようなとろんとした顔で笑う埜亜。それが慧はたまらなく

愛おしかった。

「……唇がいい」

慧は自分の欲望を素直に口にした。だが埜亜は小悪魔的な笑みを浮かべて。

「え〜、どうしよっかなあ〜」

「焦らすなよ」

「お願いしますは？」

「……お願いします」

「ふふっ……素直で宜しい。……ちゅっ」

今度は唇に。触れ合うだけではなく、恋人同士の深いキスだ。

舌と舌を絡め、互いの唾液を交換し合う。室内に水音が響くが、不思議とそれは淫靡な音ではなく、何か神聖な儀式を行っているようだった。

「んふっ……、……ぷはっ」

何度も何度も口付けを交わし、どちらからともなく離れると、二人は夢中になりすぎたのか少し息を切らしていた。口の周りは子供のように唾液でべとべとだ。

しばしの間、呼吸を整える慧と埜亜。

「ねえ……慧」

紅葉を散らした頬を更に赤く染め、埜亜はねだるような顔になる。

「今日は……お父さんとお母さん、帰ってこないんだよ……？」

もじもじと、慣れない様子で、いじらしい様子で、それでも慧を想う一心で言葉を紡ぎ出す埜亜。

「今夜は……二人きりなんだよ」

「……そうだな」

三年の月日も、決して無駄ではなかったのだと、慧はその時初めて実感した。

永い年月が、埜亜を少しだけ大人の女性にしていた。

「慧とするのは……はじめてだね」

そう言って、埜亜はブラウスのボタンに手をかけた。

\*

二人はベッドで抱き合っていた。

慧の心残りといえば、全身が満足に動かなかったせいで埜亜の身体を堪能できず、終始半ば生殺しの状態が続いたことだ。

(いつか絶対仕返ししてやる……)

そう胸の中で高々に宣言する慧。ある意味こっちの方がダメな子だった。

「慧い……」

腕の中で身じろぎをしつつ自分の名前を呼ばれる。胸に絹糸のような純白の髪がさらさらとこすれてくすぐったい。

「ん……なんだよ」

「えへへ、呼んでみただけ」

「そっかよ……」

なんとということはない、何の意味も持たない会話。無意味だけど、無価値じゃない。恋人同士だけが交わす、特別な至高の一時が今ここにあった。

「幸せだね……」

「ああ、そうだな……」

好きな人が隣にいるシアワセ。

好きな人と身体を重ねるシアワセ。

こんな簡単なことを知るのに、一体どれだけの時間がかかってしまったのか。

あまりに不器用すぎる二人だった。

「でも……」

「うん？」

埜亜の笑顔が寂しげに曇る。

「幸せだけど……一人足りないね……」

「……そうだな」

あの日は慧と、埜亜と、あともう一人。お馬鹿で、お調子者で、

それでも誰より愛すべき男がいた。

あの日はばらばらになってしまった三人が、まだ揃っていない。

「ああくそ……。元を質せば今こうして思いつ切り埜亜のことを抱き締められないのもアイツのせいだっていうのに……」

「え？」

埜亜が心底怪訝そうな顔をして慧を見上げる。

「どういうこと？」

「アイツに……。紫紋に思いつ切りぶん殴られたんだよ。一発だけじゃないぞ？ 何発もだぞ？ ……まあ、アイツの叱咤激励のおかげでこうして」

「ちよ、ちよっと待って！」

突然、埜亜が急に大声を張り上げた。どうしたことかと思っで見ると、表情が凍り付いていた。

「慧、大丈夫？ 落ち着いて。どういうことかちゃんと説明して」  
落ち着いてないのは明らかに埜亜の方なのだが、その顔は真剣そのものだ。

「いや、だから……。あんまりにも青臭くて語るのも恥ずかしい話なんだけど……。今朝紫紋と大喧嘩したんだよ。殴って蹴って、殴られて蹴られて。お互い言いたい放題言い合ったんだけど……」

どうしてそれで埜亜が混乱するのか。慧はさっぱり分からなかった。

「うそ……。そんな……。でも……。いや、ありえない……」

しきりに首をひねる埜亜。俯いて独り言を喋っている。

「どうしたんだよ埜亜。何を言ってるんだ？」

とうとう耐え切れなくなって慧は質問をした。

そして、その回答は慧の想像を遙かに絶していた。

「だって、紫紋君は」

契り。(後書き)

このシーンはR指定すべきかどうか迷ったのですが、ギリギリオーケイということでした。おめでとうございます！ おめでとう！ おめでとう！ 壱亜！ しかし、最後の壱亜の態度の意味はどういうことなのか？ 紫紋はどうしたのでしょうか？ 泣いても笑ってもラスト三章！ お楽しみに！



## 奇跡。(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・《 》で書かれている部分は傍点（強調）

## 奇跡。

飛行機事故だった。

\*

フランスのパリにある空港で離陸に失敗した旅客機が大破、炎上した。乗客乗務員合わせて二百七名、負傷者は多かったものの、死者はたったの一名のみだったというのはまさに奇跡的と言えるだろう。

しかし、この事故唯一の犠牲者である青年に関するエピソードが存在する。

その青年は飛行機が大破した際に割れた窓ガラスの破片が腹に刺さり、傷を負った。傷はかなり深く、出血がひどかったという。他の乗客の肩を借りつつ、瀕死の状態で無事に脱出した。

そのまま止血処置を施せば助かる見込みは十二分にあつた。だが、機内から脱出した他の乗客の悲痛な叫び声が彼の薄れゆく意識を繋ぎ止めた。

炎上する旅客機。その一つの窓の向こうに、泣いている五歳前後の男の子の姿が見えた。母親とはぐれて逃げ遅れたのか。青年は他の乗客の制止も聞かずに機内へと全速力で駆け戻った。

結論から述べると、その男の子は助かった。すぐ眼前にまで火の手が迫ったところを青年が救出し、軽い火傷だけで済んだ。

青年は男の子を連れて燃え盛る飛行機から脱出したところで意識を失った。そのまま救急車で緊急搬送されたが、医療班の健闘虚しく、その三時間後に出血多量で静かに息を引き取った。

死亡した青年は十九歳、フランス人の父親と日本人の母親を持つハーフ。

日本名で、佐々賀紫紋という。

「……何の冗談だよ、こりゃあ……」

彗はその事故のスクラップを見て言葉を失った。

事故発生は日本時間で一昨日の夜。パリだと時差があるが、それでも同日の昼だ。

「……お父さんの凱旋公演だったの。でも私が事故に遭ったせいで、一人だけ帰国を早めて帰ってこようとしたの。それで……」  
だとしたら。

（今朝、俺の目を醒まさせてくれた紫紋は……なんだったんだ？）  
全て、夢だったのだろうか。いや、その仮説は彗の全身に無数に出来た痣によつて否定される。だとしたら、あれは。  
「フランスにいる紫紋君のお母さんも電話で知らせてくれた。紫紋君はあつちでは英雄だつて。国全体を上げての葬式が行われる予定だ、つて……」

「は、ははは……なんだよ、これ……」

彗は手の中にあるスクラップ記事をぐしゃぐしゃに潰した。

「一体なんなんだよ！ これは!？」

そして叫んだ。叫んでゴミ箱へ向けて放り投げた。狙いが定まらずに壁にはね返つて床を転がった。

「ふざけるなっ！ ふざけるな、なんだこれは!？ 盛大なドッキリか！ タチが悪すぎる!！」

おバカな紫紋にしては、あまりにも笑えない冗談だ。

「俺はこの目で見たんだ！ 紫紋と確かに会つたんだぞ！ 会つて殴り合つたんだ!！ アイツと、紫紋と産まれてはじめて本気で喧嘩したんだぞ!！ あれが……あれが嘘のはずがない!！」

叫ばずにはいられなかった。何かが狂っているとしたら自分以外の全てが狂っているとしか考えられない。

「彗……」

「あれが……あれが……っ!」

道化は道化らしく、最後まで笑つてなきや、嘘だろ？

「……ふざけるなよ紫紋……!」

彗は奥歯を噛み締めずにはいられなかった。ぎりぎり磨り減る

くらいに硬く噛み締める。

「こんな最期が赦されるものか!!!!!!」

慧は天に向かって吼えた。人はどうして天を仰ぐのだろう。そこには、気紛れな神しかいないと分かっているのに。

「泣かないで……慧……」

背中から埜亜が抱き締めてきた。震える両手で、埜亜が。

「こんな……こんなっ……!!」

「泣かないでよ……慧い……っ」

神よ、こんなものが奇跡だともいっのか!!?

「神様は、奇跡なんて起こしてくれないよ……」

埜亜が言い聞かすように口にした。

慧に。そして自分自身に。

「慧がこんなんじゃ、紫紋君に怒られちゃう……」

「……っ」

「幸せになるう？ 二人つきりだけ……二人ぼっちだけど、絶対幸せになるうよ。天国の紫紋君まで届くくらい幸せになって……また、一からやり直そうよ。ねえ、慧……慧い……」

発作が起きたのか、埜亜はそれ以上口を開かなかった。開けなかった。溢れ出る涙だけが止まらない。

長い沈黙だった。そして。

「……ああ」

慧は頷いた。

(紫紋……俺は幸せになる。埜亜を幸せにする。俺達は絶対に幸せになってみせる。それがこんな俺に出来る、お前へのたった一つの恩返しだ。だから……)

赦して欲しい。

「あとちよつとだけ……っ」

今晚だけは、泣かせてくれ。

## 奇跡。(後書き)

告白します。執筆開始時には全く考えていなかった設定です。途中でぽつと浮かんできて即採用という形になり、こういう結末に至ります。今振り返って見てみると、どうやら自分は『奇跡』という言葉をもこの場に於いては否定的な意味合いで使っているなあ、と思いました。そんなわけで最後のどんでん返し、如何だったでしょうか？ いやいよ残りは二章のみ、どうかあと少しだけ、慧と埜亜を見守ってあげていて下さい。

## 心の平和。(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・《 》で書かれている部分は傍点（強調）

## 心の平和。

慧と埜亜はフランスにいた。

目的は勿論、紫紋の墓参りだ。

紫紋の墓は、父親の本宅の庭に細々と置かれていた。日本のそれとは違い、外国調のシックな墓石にはこう刻み込まれていた。

『Simon de Ferdinand』

フェルディナンというのは紫紋の父親の姓だ。後に続く文字は、フランス語なので慧達には読むことが出来ない。こちらの名前には？h?がないんだな、と慧ははじめて知った。そして、名前と苗字の間にある？de?は、紫紋が命がけて救った少年の家族から贈呈されたものらしい。

「……没落貴族だったそうです。『シモン・フェルディナン殿の勇敢な行動に最大限の敬意と感謝を以てこれを贈る』と」

そう紫紋の母親が日本語で解説してくれた。

「少しの間……二人にさせてもらえますか……」

慧がそう言うと、紫紋の母親は一礼して立ち去った。

慧と埜亜は静かに黙祷を捧げた。十字も切らない。手も合わせない。神には決して祈らない。ただ親友のことを想い、悼む。最後の最後の最期まで自分達のことを想ってくれた、愛すべき愚か者のことを。

生ぬるい風が、芳しい花の香りを運んでくる。春は、もうすぐそこだった。

そして。

「……ヴァイオリン？」

春風に乗って、厳かなヴァイオリンの音色が家の方から響いてくる。聞き覚えのあるメロディー。日本人なら誰もが一度は耳にし、口ずさんだことがある悲しいその歌。

「慧……」

「……ああ」

野口雨情作詞、中山晋平作曲。

シャボン玉 飛んだ

屋根まで 飛んだ

屋根まで 飛んで

こわれて 消えた

シャボン玉 消えた

飛ばずに 消えた

産まれて すぐに

こわれて 消えた

風 風 吹くな

シャボン玉 飛ばそ

唱歌『シャボン玉』。

「……見える？ 慧」

埜亜が口を開く。

「……ああ。見えるよ」

慧が口を開く。

二人がすっかり捉えた視線の先では。

紫紋が、太陽のような笑みを浮かべていました。

やがて太陽が沈む頃。

あの人と、束の間のおわかれ。

「……良かったの？」

ふと、埜亜が呟いた。



「うん？ 何が？」

「医者になるって……子供の頃からの夢だったんじゃないの？」

「ああ……そのことか」

慧はゆっくりと首を振るった。

「いいんだよ。俺には……他にもっともっと大切な夢が出来ちまつたからな」

言語聴覚士。

言語障害や聴覚障害を抱える人の手助けをする、日本では比較的新しい国家資格。合格率は他の国家試験に比べて高いが、満身にコミュニケーションをとることが出来ない人を相手にしなければならぬため、続けていくにつれ高い精神力と忍耐力を要求される、相応な根気が必要な職業である。

それが、慧が決めた新しい夢。今は、来年の二月上旬に行われる国家試験に向けて猛勉強中なのだ。

「一番初めの患者さんは、もう決めてあるんだけどな」

そう言って慧は埜亜を抱き寄せた。頬を染め、そっと目を閉じる埜亜。

もつきつと、ここに来ることはないだろう。慧も埜亜も、そう確信していた。二人に必要なのは過去これまでではなく未来これからなのだから。そして、紫紋本人もそんなことはきつと望んでいない。想い出は想い出のまま、彼らの胸の中で佐々賀紫紋は永遠に生き続けるのだ。

だから、今度こそさよならを。再び歩き始めるその前に。

「merci, un ? tre irrempla?able (ありがとう、誰よりもかけがえのなかった人)」

\*

SUI

「埜亜」

俺は乱雑に埜亜の左手を奪った。

そして、薬指に？それ？をはめる。

「え？」

それは。

あの日渡しそびれた。

紫水晶のついた、小さな指環。

「結婚しよう、埜亜」

その言葉は驚く程自然に俺の口をついて出た。

「

結婚しよう。ずっと一緒にいよう。埜亜に、この先ずっと『心の平和』をもたらし続ける役目を俺にくれ。それは安物だけど……籠めた想いは、きつとどんな宝石にだって負けない」

《その色》を持った男が、そんな強さを俺にくれたから。

「……コイツの前で、それを誓いたかった」

埜亜の顔が、みるみるうちに美しく歪んでいく。目尻に溜まった涙が線になって落ちるその刹那、埜亜は俺に背を向けてポケットから取り出した携帯電話を操作し始めた。

「……携帯？」

待つこと数秒。顔をこちらに向けることなく埜亜はずい、と携帯のディスプレイを俺に突きつける。

そこには。

『ばか。またほっさがおきちゃったじゃない』

という言葉が入力されていた。

漢字に変換する余裕もなかったのか。そう思うと、目の前の少女がどうしようもなく愛おしかった。

「……返事は？」

俺は分かり切っていることをわざと尋ねた。螺旋のように混ざり合う、ちよつとした悪戯心と真剣な純情。

埜亜は再び携帯を操作し始める。そして、再び俺の目の前にディスプレイを突き出す。

「……近すぎて見えないんだけど」

その言葉に反応して遠ざかる埜亜の手と。

迫る埜亜の顔。

こと、と携帯電話が地面に落ちる。

埜亜は震えるくらい背伸びして。

俺の唇に、最高の返事をくれた。

け。

携帯のディスプレイに書かれていた言葉は、たった二文字だ

世界一優しい罵り文句だった。

『ばか』

## 心の平和。(後書き)

祝！ 二週間連続更新！ いやいや、本編も残すところあとエピローグだけとなってしまうたわけですが、紆余曲折逆境困難ありつつも、最後には慧と埜亜に幸せになってもらうのが当作の目的でして一応はいたるところに張り付けておいた伏線は全て回収することができたのではないかと、作者的には思っています。紫紋は申し訳なくもあまり出番がなかったわけですが……彼がいなければ最終的には慧と埜亜は本当の意味での幸せを手にすることはできなかったのではないかと、無事役割を果たしてくれたものと信じています。野暮な話になりますが、実存の唱歌の歌詞の引用には著作権が必要であり、これはそれを無視しての当作唯一の一編となっておりますが、まあご寛恕願います。また、携帯版では見られないと思うので説明を。慧と埜亜と一緒に紫紋に別れを告げる台詞はフランス語ですが、unの次の文字はeの上に^を付けたもの、最後の長ったらしい単語のaとaの間にはcの下によるによるがついたもの(セディーユ)が書かれています。脱字ではないですよ。第十四部『紫紋』最後の台詞もt r sのtとrの間にeの上に“ゝ”が付いたものが書かれています。遅まきながら、解説終わり。さて、大切なことなのでもう一度言いますが、この作品も残すところあと一章、エピローグを残すだけとなりました。ここまで続けてくることができたのも、皆様のご愛顧の賜物だと思っています。一足早くではあります、まずは謝辞を。それでは、『ハピネス』僕と私と彼のキセキ』最終章をお楽しみ下さいませ

## ハピネス。(前書き)

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の（ ）で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ ≪≫で書かれている部分は傍点（強調）



「！！ 慧はドジだからまた事故にでも遭ってるんじゃないかって！  
未だに料理の時に砂糖と塩を入れ間違えるような埜亜に『ドジ』  
などと言われたくないのだが……。」

「ごめん、悪かった。どうしても具合の悪い患者がいたんだ。メルもちゃんと送っただろ？」

「そうだけど……。」

「こつというのは理屈ではないのだ。慧も埜亜もそんなことは分かっている。」

「うーっ」

「つたく……。ほら、行こつぜ」

慧はちよつと強引に埜亜の手を引いた。今日は久しぶりのデートなのだ。膨れ面をしていては楽しめるものも楽しめない。

十二月二十四日、クリスマススイブ。十年前に台無しになったデートをやり直しに来たのだ。場所は駅前プロムナード、時間は十六時、天気は晴れのち曇り。全てあの日のシチュエーション通りである。

二人は電車に乗った。駅を五つ通り越し、終点に到着する。

「……なあ、埜亜」

「……なによ」

「寒くないか？」

「……寒い」

流石にこの季節に海に来たのは失敗だったかもしれない、と二人は反省した。陽は水平線の向こつへ落ち、切るような海風が肌に痛い。

「寒いから、こつする」

「こつ言つて埜亜はおずおずと、慧の右腕に自分の左腕を絡める。そしてその薬指には、未だに紫色の指環がついている。」

「こつすれば、寒くないよね？」

「……そうだな」

それは、人の温み。命の温み。三十六度五分。大切な人のかけがえない温度。

「アレ、持って来たでしょうね？」

「当たり前だろ。……ほら」

そう言って慧が鞆の中から取り出したのは、一つのデジタルカメラだった。つい先週発売になったばかりの最新型である。

このメモリーを、二人のシアワセでいっぱいにしてしようと約束したのだ。そして、今日はその記念すべき一枚目。

「生憎、通行人がいないな……。これでいいか？」

慧は左手を思いつ切り伸ばし、カメラのレンズをこちらに向けた。うまく撮れるかは分からないが、それもきつと大切な思い出になる。

「オッケーオッケー。じゃ、早く撮って撮って」

「はいはい……。んじゃ、撮るぞー。三……二……一……」  
ゼロ、と同時に頬に温かな感触。

「うわっ!？」

慧は思わずびっくりして声を上げてしまう。次の瞬間にデジタルカメラのシャッターが切られた。

「えへへー」

「お前ね……」

思いがけない不意打ちにカメラがぶれてしまった。メモリーの一枚目に刻まれたのは、小悪魔的な笑みを浮かべて慧の頬に口付けをする埜亜と、びっくりした顔を浮かべる慧が見事にぶれた写真だった。

「あーあ……。どうすんだよ、記念すべき一枚目だっていうのに……」

悪態をつく慧ではあるが、実際は満更でもなかった。何故なら

「いいでしょ! だって」

慧の腕をすり抜け、海辺へ駆け寄る埜亜。そして、純白のポニテールを揺らして振り返ったその表情は。

「私はもう、シンメトリー章田埜亜じゃ! ないんだからっ!」

今までに見たどんな笑顔よりも、輝いていたのだから。



雪が降る。恋人達の愛の語らいを祝福するように。聖夜に深々と  
白い粉雪が舞い落ちる。

気紛れで。

くそつたれな。

万能の神様からの、クリスマスプレゼント。

これからずっと続いていく。

白神彗と、白神埜亜の、シアワセの物語。

F i n .

## ハピネス。(後書き)

私はこれまで何作か書いてきましたが、登場人物全員に対して、更に言うならば作品そのものに対して我が子のように愛情を注いでいます。これは私がプライドとして自負しているものであり、この作品も勿論例外ではありません。慧と埜亜、紫紋、付け加えるとしたら岩代医師という少人数で形成されてきた当作。これにて幕を引かせて頂きます。彼らにはいくつもの過酷を味わわせてきてしまい、産みの苦しみというやつを肌で実感しているわけですが、終着点である『慧と埜亜の幸せ』には無事ベストな形で辿り着けたのではないかと思います。以上、後書きでした。

最後に、改めて謝辞を。この作品を読んで下さった皆様、感想を送って下さった方。多くは言いません、ただただ無上の感謝を。また機会があったらお会いできればと心待ちにしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3082k/>

---

ハピネス～僕と私の彼のキセキ

2010年10月8日13時00分発行